

論 文

エリート教授 中目覚なかのめあきら

—二番目に早い高等教育地理(広島高師)プログラム創始者—

石 田 寛

序

本研究は私の中目覚研究の第三報告である。なかのめあきら中目覚(一八七四—一九五九)は、多才・大物であり、当然のことながら視る人によって、その人物像が異なってくる。筆者は次の如く、中目覚を観ようとするものである。すなわちここに、本研究のために仮説を先ず以て提示したい。

一、仮説と研究方法

仮説 (hypothesis)

なかのめあきら中目覚は典型的なエリートである。そして体躯は欧米人に劣らず、性格は剛直で強い個性の持ち主で、組織力・指導力を備えていた。中目は英独佛など多くの外国語文献を博搜利用するだけでなく、世界各地(先進国から辺境まで)に度々出掛けたフィールド派学者である。二十世紀初頭日本で最も傑出したスケールの大きい、新しい逍遙学者(modern peripatetic scholar)の一人であった。国際的学者として

確立した地理学者で、その研究・著作は既成の学問枠にとらわれなかった。

なかのめあきら中目覚は授業・学校行事に情熱をもやした教育者であった。そして日本で二番目に早い高等教育地理プログラムを創始し、広島高等師範地理の基礎を築いた。持ち前の組織力・管理能力もおのずから発揮され、やがて若くして大阪外国語学校初代校長となる。校長として、教育行政官として、強い決意で、欧米偏重を改め実学を重んずべく、思い切った人事・管理運営を行い、教育理念を貫徹する。直接生徒に教える情熱を持ち続けると共に、世界旅行と幅広い研究・著作を続ける。官立学校退官後、さらに四半世紀間、『生涯現役』で通す。なかのめあきら中目覚は学問研究のみならず、アルプス登山・紀行文においても日本人として先駆者であり、学際的、通文化的研究を地で行った先駆者である。

研究方法

(1) 伝記的著作物的研究 (biobibliographical approach)

著作物を中心に研究展開をみていくのであるが、その履歴的背景、時代的背景との関連において著作物中心に調査研究の展開過程をみて

第1表 中目覺の時期別研究教育活動

		研究分野別著作数						担当科目	特徴的研究対象地
		地理	言語	教育	歴史	文学	その他		
教授時代	四高							ドイツ語	ヨーロッパ 東アジア
	広島高師	22	11	1				地理学	
	松高	3						地理・ドイツ語	
校長時代	大阪外語	20	5	6	2	1		(なし)	アジア・アフリカ 欧米
官立学校退官後	(興亜学院)	7	7	1	5	7	2	ゲオポリティクス 経国学	アジア 郷土研究 (中目家歴 史研究を 含む)

注1. 中目覺著作一覧 (石田寛, Jan. 30 / 2000)
中目覺略年譜 (石田寛, Jan. 30 / 2000)

注2. 著作物をどの学問分野に入れるかは、中目の場合ことに困難であるが、上記のごとく提案したい。

いくことにする。
(2) 中目覺活躍の三時期区分と多面的研究
伝記的研究のための時期(教授就任後の)は、官立旧制高校・専門学校教授時代、官立専門学校校長時代、官立学校退任後に三区区分される。夥しい著作物を大胆に分類し、各時期ごとの著作物を、研究分野ご

とにその数を示したのが第1表である。中目覺の著作物を一応、地理、言語、教育、歴史、文学及びその他に分類した。しかし中目の著作は、いづれをとっても学際的であり、簡単に地理とは云い切れないものが多い。それが、他学科の分野に踏み込んでと高師の若い卒業生にうつつたところであり、その反面、中目覺の話の聴いて豁然としたと遠来の夏期講習受講生をして述懐せしめた所以でもある。北京興亜学院校長時代の中目覺を評したのも、地理学者・言語学者としており、死亡記事、追悼文も大部分のものが地理学者・言語学者としている。⁽³⁾ 広島高師では地理学教授であり、松山高師(教頭)での担当科目は、地理学・ドイツ語であった。さて、本論において論じようとするのは、このような全体像のなかにおける教授時代、しかも広島高師教授時代に重点をおくものである。

中目覺がかつて勤め、関係の深かった機関から資料入手の手掛かりが得られたものの、根本資料が入手できたのは中目伊四彦氏の積極的協力によるものである。更に中目覺のかつての教え子、知友、そして多くの方々からも重要な資料・情報が得られた。

かくて中目覺についてのイメージが膨らんでいったが、余りにも大物、多才で、一つの学問分野で評価し、レッテルを張ることの難しさを痛感している。

中目覺の教授職は、ドイツ語の教授としてスタートを切り、ウィーン(ヴィエンナ)大学満三年留学で、国際的地理学者としての地歩を確立、地理学の教授を十六年(含む留学期)勤め、松山高師教授(教頭)に転出して、地理学・ドイツ語教授として二年半勤めている。専門学

校校長は決まった授業は持たないが、大阪外国語初代校長として管理運営の「教育行政官」としての手腕を十分に発揮しながら、突然休講になった授業時間を貰って講話をよくした。フィールド派研究者であると共に熱心な教育者でもあった。

北京興亜院長時代一ヶ年足らず地理(経国学、ジオポリチク)を講じている。初心忘れず、最晩年、日本における氷河研究の原点ともいべき地、山形県に二度も出掛け、災害の原因を探ろうとしている。

従って地理学的研究を中心に据えて、多方面の活躍・著作との関連において中目覚を覗いていくことこそ、中目覚の生涯を理解するのに最も相応しいと信ずるものである。

二、本研究の意義

中目覚の伝記も著作目録も未だ作成されていない。中目本人は自分を顧みる暇もなく、八十四歳まで走り続け書き続けたのであった。林健太郎東大名誉教授(一九七〇か七一年、当時ドイツ史専攻教授、後東大総長)が中目覚の女婿目黒三郎教授を通じて中目伊四彦に中目覚の伝記作成の意図を伝えたが、タイミングが悪かったようである。中目覚の伝記的作品は皆無であるという点において、私の中目覚研究は意義(significance)を主張しうるであろう。本稿は頁数に限りがあるので、教授時代、しかも広島高師教授時代、それも留学から帰ってからに重点を置いているが、全期間の行動・研究著作などの表示・図示につとめ、全体的展望の上での、広島高師時代の論述であるよう、配慮した積もりである。

本研究は広島大学の前身たる広島高師草創期における中目覚の活動を研究したものであるが、広島大学の古い前身校の持っていた意気込み、高レベル、存在感を伝え、教育史的意義を持つとともに、地理学のあるべき姿を探る糧ともなるであろう。

中目覚に対する私の最初の関心は、中目が広島高師地理プログラムの創始者であったからである。そして偶々私の恩師高尾常盤先生(一八八〇〜一九三六)の前任教授であることが親しみを加えた。それは中目覚がリヒトホーフンを恩師A・ペンクの前任者として畏敬しているのと同じ立場にある。さらに付加えるならば私は高師の後身たる広島大学文学部地理学教授の席をけがし(初代中目覚から算して五代目、第1図参照)た者で、先師畏敬、温故知新の思いの切なるものがある。

第一章 出自・教育―エリート経歴と背景

中目覚は略年譜(第2表)にみるように、東京帝国大学文科大学独乙文学科を優等生として、時計一箇下賜されて卒業(明治三十二〜一八九九)七月(写真1)、同年八月直ちに弱冠二十五歳にして、第四高等学校教授(ドイツ語担当)に任用され、四年後、地理学研究のため満三ヶ年間オーストリア・ハンガリー国へ文部省留学を命ぜられる(写真2)。その翌月設立草創の広島高等師範学校教授(地理学担当)に任命される(第2表)というエリート教授である。

修学中、中目覚は貧乏であったと時折述べているが、廃藩置県で父親は経済的基盤を失ったとはいえ、やがて郡長、県会議員にと、着実

第2表 中目覺略年譜

作成：石田寛 Jan. 30, 2000.

1874 (明治7) 年5月23日		仙台区北九番丁十九番地において、仙台藩士中目安富次男として生まれる
1880 (明治13) 年		六歳の時、北八番丁満勝寺の和尚について手習漢文の素読を始む
1887 (明治20) 年9月	(13歳)	宮城県尋常中学校へ入学、仏人ジャッケ神父に仏語を学ぶ
1888 (明治21) 年4月		学制改革により旧制第二高等学校第一部法科に編入
1896 (明治29) 年7月	(22歳)	第二高等学校卒業、同年9月帝国大学文科大学独乙文学科へ入学
1899 (明治32) 年7月10日		東京帝国大学文科大学卒業、優等生として天皇陛下より時計一個御下賜
1899 (明治32) 年8月	(25歳)	第四高等学校教授
1903 (明治36) 年8月21日		地理学研究のため、満三ヵ年間奥洪 (オーストリア・ハンガリー) 国への留学を文部大臣男爵兒玉源太郎より命ぜらる
1903 (明治36) 年9月	(29歳)	広島高等師範学校教授
1903 (明治36) 年11月28日		奥洪国留学のため出国
1907 (明治40) 年4月		奥洪国より帰国
1907 (明治40) 年7月16日		満韓に出張 (8月6日帰学)
1909 (明治42) 年11月18日		韓国へ出張
1910 (明治43) 年4月	(36歳)	広島高等師範学校生徒監 (大正3年5月まで)
1910 (明治43) 年9月15日		京都帝国大学文科大学講師、年手当650円 (1913年8月31日まで)
1912 (明治45) 年3月		学術研究のため北海道および樺太へ出張
1912 (明治45) 年7月		先住民に関する調査を樺太庁から委嘱さる
1914 (大正3) 年6月	(40歳)	文部省視学委員 (大正4年まで)
1914 (大正3) 年10月		露領西比利亜および満州における小学校教育の実況調査のため出張 (給手当金式百円)
1919 (大正8) 年6月2日	(45歳)	松山高等学校教授 (教頭)
1920 (大正9) 年6月30日		大正九年度社会教育講師を嘱託 (文部省)
1921 (大正10) 年5月23日	(47歳)	第二外国語学校創設委員
1921 (大正10) 年12月11日		大阪外国語学校校長
1924 (大正13) 年7月		アメリカ合衆国、メキシコ出張 (文部省)
1925 (大正14) 年5月28日		成人教育講習会講師嘱託 (文部省)
1925 (大正14) 年7月8日		成人教育委員を嘱託 (文部省)
1926 (大正15) 年6月30日		成人教育委員を嘱託 (文部省)
1927 (昭和2) 年5月		東アフリカ、インド、蘭領インド、インドシナへ出張
1928 (昭和3) 年7月		支那へ出張
1929 (昭和4) 年10月		朝鮮へ出張
1930 (昭和5) 年8月		支那へ出張
1932 (昭和7) 年7月		フィリピンへ出張 (文部省)
1933 (昭和8) 年5月27日		大阪帝国大学文官普通分限委員会委員 (大阪帝国大学)
1933 (昭和8) 年9月27日	(59歳)	大阪外国語学校退職
1940 (昭和15) 年3月1日	(66歳)	北京興亜学院長
1943 (昭和18) 年4月5日	(69歳)	北京興亜学院長退職
1945 (昭和20) 年10月	(71歳)	米国 CIE (民間情報教育部) 嘱託 (1947年3月まで)
1950 (昭和25) 年9月	(76歳)	宮城県史編纂監修者 (昭和28年まで)
1959 (昭和34) 年3月27日	(84歳)	仙台市北九番町十九番地の自宅にて他界

栄 誉

- 1、1925 (大正14) 年7月10日 (51歳) フランス国公教育功労章
- 2、1932 (昭和7) 年12月17日 (58歳) 従三位勲二等
- 3、1933 (昭和8) 年5月18日 (58歳) ドイツ国十字勲章 (金)

(注) 1. 年齢は満年齢

2. 中目伊四彦提供「中目覺略歴」を目黒士門提供辞令類その他の資料によって増補

履歴書

宮城縣仙臺市北九番丁
一占地士族

中目覺

一明治十五年十月宮城師範學校附屬小學校・入り全
七年九月退校

一明治二十年九月宮城縣尋常小學校・入り全
廿一年二月退校

一明治廿一年四月第二官學不學校・入り

一明治廿七年七月学制変更ニ依リ第一官學學校第一
部法科ニ編入セリ

一明治廿七年九月文科大學ニ轉入

一明治廿九年七月同校卒業

一明治廿九年九月帝國大學文科大學獨逸文學科ニ入ル

一明治三十年七月次學年、特許生ニ撰定セリ

一明治三十一年七月次學年、特許生ニ撰定セリ

一明治三十三年七月十日文科大學卒業

一日日優等生トシテ 天皇陛下より時計一個御下賜

右方通左邊各ニ係也

右 中目覺

明治三十三年七月

写真1 中目覺自筆履歴書

(中目伊四彦提供)

第四高等學校教授中目覺

地理學研究ノ為メ滿三
箇年間奧洪國へ留學
ヲ命ズ

明治三十六年八月二十一日

文部大臣男爵兒玉源太郎




写真2 オーストリア・ハンガリー国留学辞令

(目黒士門提供)

に生活の基盤を固めていった。中目覺の出自は、中世以来の由緒ある家系である。「大崎家の家老中目兵庫の後裔、初め遠田郡八幡に住す。天明年間仙台北九番丁に屋敷を拝領転住す⁽⁷⁾」。中目覺の祖父は出入司支配という要職についた。分かり易く言えば家老格（仙台藩には家老という職制がない）で学者を輩出した家であった⁽⁸⁾。中目家年中行事の一つは夏の虫干で、書画の虫干も二、三日はかかったが、父親は生前は虫干を怠らなかつた。広い屋敷、そして家藏本、書画の保管の行き届いた環境で育ち、青葉神社への参拝も厳重に行っていた⁽⁹⁾。

六歳の時、満勝寺和尚について手習と漢文素讀を始め、尋常中学校の時、フランス人神父にフランス語を学び（日本語とフランス語の教え合い）、二高時代は文学青年で「学校の仲間と千紫万紅会という会を起こし千紫万紅という雑誌を出した。僕も時々書かされた⁽¹⁰⁾」。その頃「高山樗牛、高浜虚子、河東碧梧桐などと交友関係を持った⁽⁴⁾」。「大学では文科を選んだ……学校の教師であれば……高等学校なり中学校なりへ行くと直ぐ年俸九百円もらえる。年寄りの父をよるこぼしてやるには文科に限ると決心した。父親から毎月十三円の学資をもらうが、毎月二円五十銭の授業料は大変で、クソ勉強して二年の時も三年の時も特待生になり授業料が免除されました。……大学三年の時、第百銀行の行員が十名ほどが中心になり、それに下村海南、林幹太郎さんなども加わってフランス語の講習が始まったのです。月手当て十円という高俸をもらって大いに助かりました。是等の諸君は非常によく勉強して十ヶ月足らずで皆ものにした⁽⁶⁾」。

時計下賜の栄に浴した東京帝国大学文科独文科の卒業論文は近

松門左衛門とその作品について（ドイツ語）であり、それが殆どそのままドイツの学会誌に掲載されたという⁽¹¹⁾。

四高教授時代に四高校長北條時敬（一八五八〜一九二九）が明治三十五（一九〇二）年五月広島高師初代校長に命ぜられ、それまでの出會いの中からこれぞと思う人材を誘う。広島のカリスマ的存在となつていく西晋一郎教授もその一人であった。中目覺は世界各地へ旅行したい、そのために留学をと率直に述べたのに対し、北條時敬校長は、ドイツ語では望みはないが地理学なら可能とのことで、オーストリア・ハンガリー国満三年間の留学辞令（一九〇三年八月、写真2）、広島高師教授の発令（一九〇三年九月）となる。広島高師ではわずか数ヶ月授業しただけで、明治三十六（一九〇三）年十一月渡欧の船出をする。

『渡欧日記』によると、『ベデカー』（Baedeker）二冊のほか、字書類三冊を持って、明治三十六年十一月二十八日、日本郵船会社河内丸に上船、途中三十日に神戸に降り、夜行列車に乗り翌十二月一日未明、広島着、元の宿へ行く。正午学校で告別式をして、二日午後八時に下関、そして端船を雇うて対岸門司に停船中の河内丸に上船する。上海・香港・シンガポールと天候・景観が変わっていくものの全体的に日本人の活躍に眼を見張る。シンガポールを過ぎ、ペナン・コロンボと印度洋に入ると景観が変わることながら、日本的なものも急減を改めて認識する。途中下船してアラビア・アフリカ世界を体験し、アレキサンドリア港にて上船、アドリア海奥部トリエステ港に上陸、一月二十日早朝ウィーン（ヴィエンナ、維也納）に到着。船路五十三日の間に、アジア人としての自覚を強める。

ウィーン大学では、ペンク(A. Penck, 1858~1923)・ブリュクネル(E. Brückner, 1862~1927)に直接師事し、氷河地形、氷河気候学などを学ぶのみならず、幅広く勉強する。在壇中長期の旅に毎年出掛け、克刻な記録をとる。これら資料と得難い体験を持って、明治四十(一九〇七)年四月広島へ帰る。これら旅行記に中目地理学・中目覺の学問研究の原点が窺われる。もつとも一番社会的関心(山岳界、アルプス登山など)を呼んだのは「アルプス山とライン河」⁽¹⁻³⁶⁾である。

日本では、明治末期に地理学の高等教育プログラムが実施されたのは高等師範であった。二高教授山崎直方(一八七〇~一九二七)がドイツ三年留学の命をうけ、やがて東京高等師範学校教授に任ぜられ、帰国後日本最初の高等教育地理プログラムが展開したのである。中目覺・広島高師の地理プログラム展開はこれに次ぐものであった。

四年振りに広島高師の教壇に立つてみれば、ヨーロッパ出発前に教えた生徒は帰国の一年余り前に卒業していた。すべてに積極的な中目覺は、教育・学校行事に熱心に取組む。その第一は第二回滿韓修学旅行へ引率者として参加し、貴重な観察をする。ちなみに、第一回滿韓旅行は、東京帝大、第一、第二高等学校をはじめ、全国から多くの学校が参加、広島高師は北條時敬校長以下参加。総勢六〇〇余人の十七日間に亘る大旅行であった。これに続く第二回の全国各校からなる修学旅行団に広島高師からは中目覺、栗原基(英語)両教授監督の下に、四十四名が七月十六日から八月六日まで半島・大陸を旅行する。尤もこのような全国規模修学旅行はこの第二回(明治四十年)を以て廃止された。その後も中目覺は、明治四十二(一九〇九)年高師地理歴史部の

滿韓旅行を引率する。そして、その時々観察が中目覺の貴重な研究の糧となっていたのである。

外国留学経験の長い者にとっては、外国からの来訪、就中留学先の恩師の来日ほど、刺激と光栄をもたらすものはない。帰国の翌々年、すなわち明治四十二(一九〇九)年春、恩師A. Penck博士がアメリカからの帰りに来日、京都、東京で山崎直方先輩とともに接遇する。ペンク先生は、寺社の美、愛する二人の教え子との再会を心から喜び、上海、青島、北京と清国をみて、バイカル湖の景観をめでて、シベリア、ロシア経由で五月ベルリンに帰着。親愛なる中目、宛の書翰は、ペンク博士の写真とともに最期まで中目覺の書齋に掲げられていた。⁽³⁾



写真3 A. ペンク博士 (1858~1945)
中目覺が最期まで書齋にかかっていた恩師
(目黒士門提供)

中目覺は帰国後、日本、いわんや広島に閉じこもるようなことはなかつた。広島在任中に、韓国、シベリア、清国への出張視察に派遣されている。中目覺の上記研究関心、取組みは広島での講演、日本各地ことに樺太北海道でのアイヌなど先住民族の調査研究などから窺われる。

第二章 日本で二番目に早い高等教育地理プログラムと

中目覺の学校教育・社会活動

第一節 地理学の教科としての位置づけ

― 学校組織替えと課程変更 ―

中目覺広島在勤(十六年)の初めのうち十二ヶ年、すなわち一九〇三―一九一四は地理は地理歴史部に属していたが、あと四年間は、高師の組織替えにより、理科第三部(博物学・地理学)に属す(第1図参照)。すなわち、初めの十二ヶ年間は、歴史と密接な関連に於いて教えられていたが、高師の組織替えによって地理は博物との組み合わせで教えられるようになった。

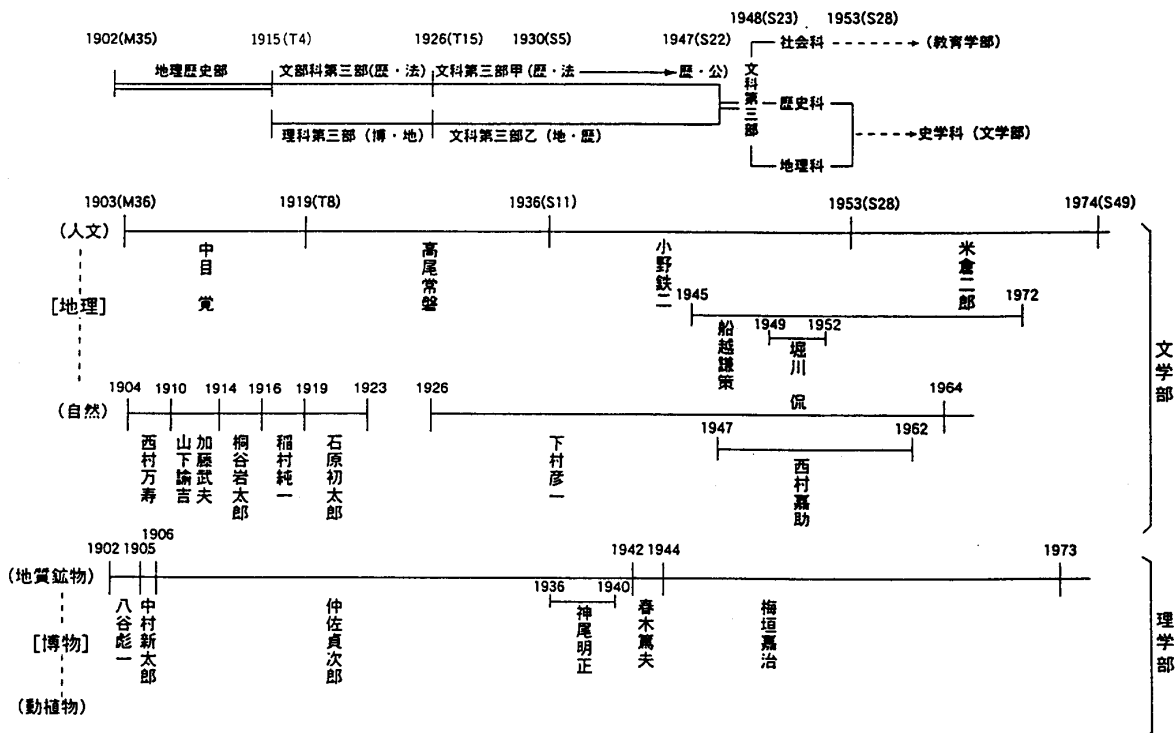
高師地理歴史(科)五十年の組織を略述しよう。⁰⁴

(一)、明治三十五(一九〇二年)創設から大正三(一九一四年)

予科(二年)、本科(三年)制。本科は五部に分かれ、地理は地理歴史部に属し、その学科目と学年配当は第3表の通りであった。

(二)、大正四(一九一五年)二月

予科、本科を廃し、修業年限四年、文科、理科の二学科に改め、文科、理科をそれぞれ三部に分ける。この時地理は、理科第三部に属す



第1図 広島での地理の系譜

- (資料) 1. 『広島高等師範学校五十年史』(昭和26年)
 2. 『広島大学二十五年史 部局史』(昭和52年)
 3. 『追懐 広島高等師範学校創立80周年記念』(昭和57年)
 4. 豊田英機、武久義彦名誉教授をはじめ多くの方々の教示を得た。
 (注) 広島高等師範学校に限定した。

第3表 学科課程

随意科		計	体 操	英 語	国語及漢文	法制 経済	歴 史	地 理	心理 学及 教育 学	倫 理	学 科 目	学 年	地 理 歴 史 部
音 楽	国 語												
唱歌 樂器 使用 法			兵式 普通 体操	講読、 文法、 作文、 会話	講 文 読		西日 史本 研究史	地理 地理 特論	心理 学	倫 理 学 史	実践 道 徳	第一 学 年	
二		六	三	五	四		八	四	二	二			
同上	講読、 翻訳、 文法、 作文		同上	同上	漢文 講読	法制 綱要	西日 洋本 史史	同上	教育 学	倫 理 学 史		第二 学 年	
一	三	七	三	四	二	二	七	四	三	二			
同上	同上		同上			法制 綱要	東西 洋本 史史	地理 特論	教 育 史	倫 理 学		第一 学 期 及 第二 学 期	
一	三	七	二			四	九	五	五	二		第三 学 年	
同上	同上					經 済 通 論	同上	同上	教 授 地 理 学 及 学 校 管 理 及 学 校 衛 生	同		第三 学 期	
一	三	六				四	四	二	四	二			

注1. 出典は『創立四十年史』広島文理科大学、広島高等師範学校、昭和17年。

注2. 右表は本科だけで、その前に予科が一年あったことは本文記述の通りである。

ることになる。理科第三部(博物学・地理学が主要科目)は学科目としては、修身、教育学、地理学、地質学及び鉱物学、動物学及び生理学、植物学、論理学、心理学、測量、天文学、化学、国語、英語、図画、体操。ちなみに、文科第三部(歴史・法制経済が主要科目)では、学科目としては、修身、教育学、歴史、法制経済、地理学、論理学、生物学、心理学、哲学、国語及び漢文、英語、体操。これにみるに、地理学は、理科第三部では主要科目であるが、文科第三部では主要科目ではなく、単なる学科目として示されている。¹⁴⁾

地理学の授業科目については次節を参照されたい。なお学校組織替に就いて、犬丸愨(大正三三〜一九二四)年理三卒)は、次の如く突っ込んだ解釈をしている。

地理・博物はもと博物だけであった処、教育界不況或いは経費節約のためとかで、文部省に博物科廃止の議が起きた時、いち早く地理博物として廃止を免れた……¹⁵⁾

(三)、地理学が再び文科へ

大正九(一九二〇)年七月に従来の文科第三部を甲・乙二つに分け、甲は歴史・法制経済、乙は歴史・地理学を主要科目とした。この制度が昭和

二十一（一九四六）年六月まで二十五年間続く。

四、終戦後における学科の統合・細分

一九四七年に文三の甲乙を統合するも、その翌年社会科、歴史科（国史・東洋史・西洋史）及び地理科の三つに細分される（第1図）。そして単位制を採用した。昭和二十七（一九五二）年三月、この制度も廃止される。かくて高師五十年に亙る歴史の幕を閉じる。

第二節 広島高師時代中目覺の教育・社会活動及び調査研究の概観

一、高師教授時代三時期—絶えず大きな存在観

広島高師の学年暦は四月から三月までで、三学期制をとっていた。

「校友会々誌」、「地理歴史学会誌」、辞令及び「中目覺略年譜」、「中目覺著作一覽」などから、全体を大観するために表（第4）を作成した。

この第4表から中目覺の高師時代は次の三期に分けて考えてよからう。

第一期、明治三十六（一九〇三）年度～明治四十二（一九〇九）年度
二十九歳から三十五歳。満三年間留学を終えて帰国後も、留学期の延長といってもよいほど行動的である。生徒の教育に情熱をもち、大陸へ修学旅行に二度も引率出張している。フィールドワークでは南九州への三年連続地形調査（しかも高千穂論争と関連させて）が目立つ。論文としては留學先に関するもの一篇。

第二期、明治四十三（一九一〇）年度～大正三（一九一四）年度

帰国から四年目三十六歳の若さで生徒監、八年目（四十歳で）文部省視学委員、地理歴史部主幹となり、高師の管理運営の中枢に任せられる（写真4）。さらに京都帝大で経済地理学・人文地理学を三年間

隔週講義する⁽⁴⁶⁾。社会的に夏期講習会も何度か請けている。

このような繁忙の中にあつて、地形の現地調査（愛媛県大野原カルスト台地、山口県秋芳洞、広島県賀茂盆地）に当たり、その間、樺太・北海道で先住民の調査・研究をする。更に東アジアに教育視察・現地調査に出張。留學中の成果、歴史地理、民族地理研究論文を発表。

第三期 大正四（一九一五）年度～大正八（一九一八）年六月

帰国から十年目（四十二歳）、地理が理科第三部に組み入れられ、以後学内の管理職から身を引いて研究の取纏め、著作物刊行に専念する。広島高師最後の五年間の研究・著作活動は眼を見張るものがある。

夏期講習（文部省

主催、高師主催、

その他）に積極的

に出講しているし、

教科書編纂にも積

極的である。



写真4 外国人ラグビー選手を迎えて（生徒監の頃）
第2列 右から5人目が中目覺
（中目伊四彦 提供）

第4表 広島高師時代中目覺の教育・社会活動、調査・研究・著作活動の表示 (時期別)

	学年暦	地理の所属	入卒業授業	教育活動	社会活動	学術研究・現地調査	著作数		学術交流 国際関係		
							書	論			
第一期	明36年(1903)	地理	地理授業開始	高師で授業 9月～11月					壕洪国留学に 出発(11月)		
	留 明37年(1904)					東アルプス地理巡検、 スイス調査旅行			日露戦争 (2月) ～ 日露戦争 (9月)		
	学 明38年(1905)		第1回卒業 (地歴17名)			オーストリア・ケルテ ン地方、イタリア旅行、 ライン河旅行					
	期 明39年(1906)						バルカン諸国、ロ シア、トルコ探訪				
	明40年(1907)			帰国、例会 で講演2回 満韓修学旅 行引率			鹿児島・宮崎県調査； 学術調査のため京 都・岡山・兵庫・ 島根県へ出張	1		壕洪国より 帰国(4月)	
	明41年(1908)		歴史			広島エス ペラント倶楽 部創設	鹿児島・宮崎県調 査			A.ペンク 博士を応接	
	明42年(1909)			韓国へ修学 旅行引率			鹿児島・宮崎県調査； 京都・長崎・熊本県へ 出張				
	第二期		明43年(1910)	史部		生徒監 教科書編	夏期講習	広島県豊田郡へ調 査出張	1		京都帝大文科 大学隔週講義 日韓併合
			明44年(1911)			生徒監 教科書編	地方講習	愛媛県大野原カル スト調査*			京都帝大文科 大学隔週講義
明45年(1912)				生徒監 教科書編 学内講演		南・北樺太調査； 北海道出張2回； 大阪府へ学事視察	2		京都帝大文科 大学隔週講義		
大2年(1913)				生徒監、北 海道・樺太修 学旅行引率 教科書編			2		A.ヘット ナー博士搔 痕石を梓川 川畔で発見		
大3年(1914)				生徒監、視学委 員、地歴部主 幹、教科書編	教育視察 夏期講習	山口県秋芳洞調査*； 広島県西条盆地調査； 茨城県へ視学出張	2		日本第一次 大戦参加 (8月)		
第三期	大4年(1915)	理科 第三部	理三(博 地)の入 学	視学委員、教科書 編、信州へ地理巡 検、九州旅行引率		露領シベリア及び 満洲小学校教育調 査出張	3				
	大5年(1916)			教科書編			1	4			
	大6年(1917)		地理歴史部 最後の卒業	教科書編	夏期講習		2	2			
	大7年(1918)		博・地最 初の卒業	教科書編	夏期講習		2	9	第1次大戦終結 (11月)		
	大8.6(1919)			教科書編			1	2			
合 計							6 (冊)	28 (篇)			

注1. 記号*生徒を同行。

2. 略記 教科書編は地理教科書編纂の略；書は書物、論は論文の略。

二、中目先生のイメージ、授業科目——中目節なかのめぶしが聞えてくる

『地理歴史学会誌』の「通信」、「会報」などの欄にのせられた在学・卒業生の記事などから、学科、教室内における中目覺の授業振り、活躍振りをみよう。

(一)、明治四十(一九〇七)年、十月例会において、中目教授はダニュー
プ河船旅行につき、例の愉快なる弁舌を振るうて名勝、古跡より
住民の生活状況に至るまで詳に説明せらる。⁽⁴⁷⁾

(二)、明治四十四(一九一一年)八月一日より十日間、徳島県三好郡
教育会において地理学を講義せられ豊富なる材料を莊重なる弁
舌にて提供されたる事なれば其会員の所得に多大あつたに違
ない。⁽⁴⁸⁾

(三)、明治四十五(一九一二年)四月、樺太北海道視察の途に上られ
た。……小樽より出帆十二日大泊着、先住民調査。……四十五年
七月十九日、先住民調査に出発。……大正元年八月九日まで滞
在。……オロッコ人の村を視察、……十七日には独木船を巖して
オロッコ人二人、ギリヤク人二人を水夫として幌内川を溯航。……
天幕露営は幾度か故郷の夢を破つたという。北緯五十度の国境を
越えて露領のゴルデコフ集落に行かれた。……引き返し二十五日
に敷香に帰着、九月六日まで同地に滞在。オロッコ文典を作成さ
れた。……その苦心と困難は想像の外である。⁽⁴⁹⁾

(四)、大正二(一九一三年)七月、八月、北海道樺太修学旅行引率、
樺太調査。地歴生徒(塚本常雄、牧健二ら五名)と博物学部三人
を七月十一日〜八月四日、北海道、樺太を案内・見学、敷香で生

徒と別れて単独で学術調査する。

大正二(一九一三年)年度の地理授業科目と担当教官の様子が『会誌』
第四号から知られる。まず一年生の教室日記からみよう。山下諭吉先
生。先生は一週二時間の地文学を受け持っておられたが僅か一学期の
みにて本校を去られたのは誠に残念であつた。只今先生は住友の技師
として活動あらせらるのである。中目先生。先生は地理、地理実習、
英語とを受け持っておられる。地理は最初郷土地理を講ぜられた。元
来地理教授には日本より世界に及び世界より日本に及ぶの二方法があ
るが、これらは共に其意を得たものでない。……自分の住する処の実
物に就いて十分なる観念を与ふるに非れば地理教育は机上の空論にな
る。この弊を是正する目的にて第一に郷土地理を講ぜられたのである。
これより広島県、山口県と各府県を講ぜられ、今では殖民地理として
北海道・樺太・朝鮮を講ぜられておる。地理実習は今製図に必要な事
柄、例えば等温線、縮図法等の描方を学びつつある。実習に関して先
生は結果の如何はさておき、可成自ら工夫せんことを望まれる。英語
はジャイルス氏の支那文明記を学んでいる。

二年生についてみよう。地理は中目先生、仲佐先生の教授を受く。
週四時間のうち中目先生三時間、仲佐先生は一時間なり。この外、地
理実習はやはり中目先生の指導せらるる所なり。実習は二時間を定め
られてあれども多くは午後二時より夕食限(今は午後五時)までかか
る。直射図法、平射図法、及び漸長図法等より簡単なる製図練習など
面白く行方が実習なり。仲佐先生の地理時間には地文の講義を聴くな
り。第一学期末までは山下諭吉先生の地文を学びしが同先生去られて

より、即ち第二学期より毎週一時間仲佐先生の講義となれり。中目先生の一週三時間のうち二時間はミルのインターナショナル ジオグラフィーを、一時間大体六、七頁乃至十頁位づつ、各自豫め読みその内容を暗誦(可成的)して行き、而して教場に出席してよりは、先生にその内容を質問せられ、又は読まされ、又は生徒より先生に種々の質疑をなすという風なり。この方法に始めのうちはなかなか骨が折れて困難とする所なりしが、とにかく骨の折れるだけそれだけ効力も大きい様に思われ、近頃はさほど困難ともせざる様になりたり。三時間のうち残る一時間は人文地理に関する先生の講義なり。中目先生の元気になることは今更申すまでもなきことにて、本校に教授せらるる外に、各所各会の講演に出席され、而して一方にはまた言語学人類学等に関する研究に極めて熱心にとめられつつあり。殊に樺太に関する研究、樺太先住民の言語に関する研究は他に見るを得べからざる特色のものと聞及べり。

三年生便りに、地理の授業をみよう。地理。一学期は中目先生の地誌『発見と探検』(原書)、山下諭吉先生の海洋学。実習は一学期を以て一通り完了したり。二学期に入り地理科の全部は中目先生の担当となり、実習の時間を以て各人地理実習に関する原書の紹介を試みたり。三学期は地理教科書の挿画解説。

以上によって学年毎の授業科目を整理すると第5表の如くなる。中目教授が、地理の授業(通論、地誌)、実習、演習を文字通り背負って奮闘している姿がみられる。郷土地理を授業で行っていることが、注目される。地理歴史学部の時期では全生徒が少教教育で地理実

第5表 地理歴史部の地理授業科目

[大正2 (1913) 年度]

学 年	授 業 科 目
第1学年 (11人)	郷土地理、地理実習、英原書による(ジャイルの)支那文明記、地文*(週2時間)
第2学年 (13人)	ミルのインターナショナル ジオグラフィー(2時間)、人文地理、地理実習(2時間)、地文** (1学期に山下、2・3学期は仲佐先生)
第3学年 (11名)	1学期 地誌(原書利用)、海洋学*(山下先生) 2学期・3学期 演習(外国原書の研究発表、及教科書挿図の研究発表)

注1. * **以外は中目教授の担当。

注2. 学年ごと人数は『年次別会員名簿』(尚志会(広島)1998)。

注3. 科目は必修、学年制(1学年は3学期制)。

習、演習で鍛えられた。そしてまた歴史、法制の外書講読でも鍛えられながら誇りを感じていた姿が「通信」から読みとれる。

大正四(一九一五)年四月、組織替えにより、新旧課程が併存する。地理学の授業を受ける者は旧課程の地理歴史部一年、二年、三年生、新しい課程で入学した理三(博物・地理)及び文三(歴史)の一年生である。この意味で大正五年度の授業科目、授業の状況は貴重である。

(五)、五月二十一日、新入会員歓迎及び満韓旅行報告会が持たれた。学生二人の研究発表に次いで、中目覚先生の「朝鮮旅行談」があり、「先生の講演頗る卓見にして……言々奇抜にして真理自ら其

中に蔵せられる」と学生委員のコメントが載せられている。

さらに、この『会誌』は興味深い通信をのせている。在校生は、地理の授業について、第一、二、三年生のそれを担当教師ごとに印象を付して述べている。卒業生便りにも中目教授に言及しているところもある。

まず博地新一年生便りをみよう。中目先生が受け持たれ、一週二時間づつ、日本地理を学んでいる。教科書は『小学日本地理教授資料報告』であつて、これに先生が実地につき、研究された豊富な知識を以て、各地方の状況を、詳細に説明されるので実に愉快である。地理の実習は(博地だけで)文科の方には課せられていない(森下記)。この「通信」から理三(博地)と文三(歴法)の一年生は地誌は一緒に受講しているが、地理実習は博地だけで歴法の生徒には課せられていない。このような形は、大正九(一九二〇)年の再組織替えに伴つて、歴法(文三甲)は地歴(文三乙)と授業を一緒に受けながら、地理実習は課せられないという授業プログラムに引き継がれていく。

「地歴一年級一瞥」をみよう。中目先生。文部省編輯小学地理教授資料報告により日本地理を講述す。生徒一読の上、重要事項に付き補説す。殊に地勢に力を入れ人文に及ぼす影響を強く論じ都市の趨勢を講じて餘蘊なく巨腕一振必ず何物かを授けらる。言常識的に似てしかも人の意表の外に出ず言々味あり、不知不識の間に見識を養うこと蓋し大なり、広島関東中部近畿中国の順にて今や鳥取県に入る。稲村先生。地文の担任、講義筆記温顔を以て諄々と説明せられ、生徒の質問に心よく応ぜらる。今や暦法につき述べられる趣味津々たり。(黒

田記)

一年生には理三と文三の二通りの生徒がいたが、二年生、三年生は高師最初からの課程、地理歴史部の生徒だけである。

地理(二年生)は中目先生よりフィリップ氏のアドヴァンストゼオグラフィを教はり居り候。先生の豊富なる経験と透徹せる批評眼を以てせらるる説明は、恰も天馬空を駆けるとでも申す可きか。時には我等をして大旅行家たらしめ、時には大経倫家たらしめ、単に地理的・政治的知識を得るのみならず発奮努力の精神を養ふ上に甚大なる効果あるものと確信仕り候。「地文」、桐谷先生の講義にて論理明徹趣味深く目下、潮流に就て承り居り候。(仲原記)

中目先生の三年生の地理は、欧文書で欧羅巴洲を学び、南北亜米利加洲は口授で、地文は二年生の時に終つていたので、人文を習ふ。勿論地理実習は二学期末までであった。(九谷記)

さらに、卒業生便りをみよう。「今春(夏の誤りか)は中目先生の御一行に接し愉快禁ぜず候ひき……」(朝鮮京畿道伊藤文治、大正四年七月二十日記)。「在校中に中目先生に連れられて行く筈でしたが実現出来ませんでしたから単独で決行してみたいと思つています。祖谷にも剣山にも石鎚山にも足跡を印したいものです……何か題目をさだめて研究したいと存じて居りますが……」(大阪、鈴木誠一郎、大正四年六月二十二日記)。「地理は本年度より中目先生の高著を採用し居り候……」(岩手県、安喰長太郎、大正四年五月十三日)。

(六) 地理歴史部卒業後七年目に、法制経済科夏期講習会に参加した一教師が、中目覺邸を訪問しての印象記を『会誌』第七号にのせ

ている。「…先生相変わらずの気焰万丈で、近来他の専門家の縄張りに侵入して弥次⁽¹⁹⁾って居られる。『鹿児島宮崎旅行談』の如きは実に破天荒の御高證である。専門大家もあつと驚いて居る。一部を強請されるやう御勤め致します。先生は例によつて頗る快活に、色々と新しい趣味と知識とに満ちた御話を沢山して下さつた…。」

以上、『会誌』にあらわれた記事を年を追つてみてきた。中目覺の僻遠の地に飛び込んだの調査研究に、地歴学会員はただただ驚嘆、限りなき敬意と声援を送っている様子が伝わってくる。

中目覺の教室での講義は調査研究に裏付けられ、充実した斬新な内容で生徒を惹きつけ、夢を与える名講義として居並ぶ諸教授の中で、最高の尊敬と言葉を受けている。例会発表では通説とは異なった新解釈を示したりして、聴講者が驚くこともあつた。研究発表、座談では、従来の枠にとらわれず、雄大な仮説を展開し、大正初期の優等生(勉強はできても研究者ではない中等学校の教師)には必ずしもなじめない点もあつた様である。

中目覺の講義^{なかのめがし}ぶりが知られ、中目節^{なかのめがし}が聞こえてくるとともに、大正四(一九一五)年度の地理の授業科目が第6表の如くであつたことが知られる。かくて広島高師における専門地理学の展開過程を垣間見ることができよう。

学年進行に伴い、大正七(一九一八)年度には新課程で入学した者だけとなり、地理の授業は第一学年から第四学年まで行われるようになり、整備されていく。しかし生徒定員数からみると、地歴部時代に

第6表 課程移行期における学年ごと地理授業科目

[大正4 (1915) 年度]

学 年	授 業 科 目
第1学年 (34人)	日本地誌(2時間)、地文(自然地理*)、 地理実習
第2学年 (8人)	Advanced geography(地理通論)、 地文**
第3学年 (15人)	世界地誌、人文、地理実習(第2学期末 まで)

注1. *稲村純一講師、**桐谷岩太郎助教授担当、それ以外は中目覺教授担当。

注2. 学年人数は『年次別会員名簿』(尚志会(広島)、1998)より算出。

注3. 第5表に同じ。

比べて約二倍に増えて、徹底した少人数教育が少し変わっていく姿がみえる。中目覺は、この完全切り替え、授業科目の組み立て、講義と、大正七年度は教室内で忙しい(写真5)。研究ではさらに多忙を極めた。小樽手宮洞窟の古代トルコ文字の解説⁽¹⁹⁾で、学会のみならず小樽地元へも大反響を呼び中目覺の生涯で最も忙しく、そして最も輝いた年でもあつたといつてよからう(第四章第一節参照)。このような状況下で、大正七年度に中目覺が作成した地理授業科目、高等教育地理プログラム(四年間配置)が、広島高師その後の地理授業科目の根幹となつていく。筆者もこのシステム(文三乙)で学んだ者の一人

である。

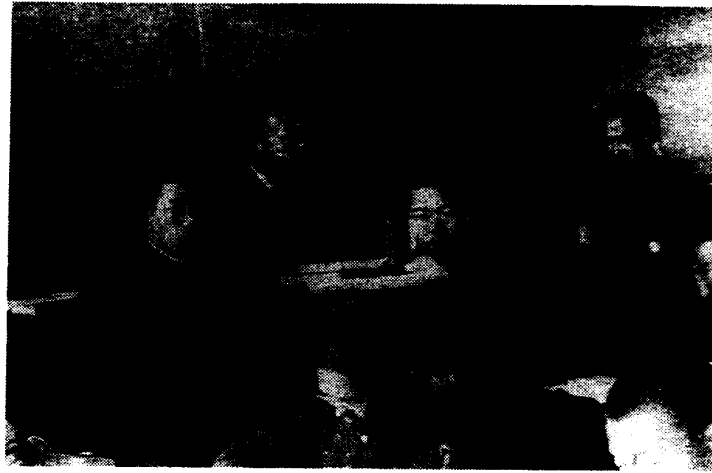


写真5 高師地理実習指導の中目覺

最後列斜右向き

『掖獎帖』(大正7年)より

(森田雅一提供)

第三章 意欲的な夏期講習会

— 中目地理学のかたちと本質論を覗かせて

さきに、徳島県三好郡教育会主催の「地理学の講義」(明治四十四(一九一)年八月一日から十日間)のことを述べたが、文部省主催の広島高師地理学講習を、明治四十三(一九一〇)年、大正三(一九一四)年、大正六年、大正七年と四回担当している。そのほか広島高師主催のものにも出講している。

明治四十三年の夏期講習については詳述するが、大正三年のは簡述にとどめ、大正六年講習は省略する。そして大正七年講習については再び詳論する。これら講習会から中目地理学のかたちと本質が見えてくる。第二章第二節でみたことと相俟って、広島高師における地理の授業、中目覺の高等教育としての地理観・地理教授論が明らかになってこよう。さらに、広島高師における専門地理学の展開が見られる。

一、地理実習(明治四十三年、夏期講習会) — 中目地理学のかたちを覗かせる

やがて地理学者として大をなす小田内通敏(東京高師地歴専修科卒、一八七五〜一九五四)が受講生として参加しており、貴重な記録を残している。それについて述べていこう。

中目講師は、今回の講習の主眼たる地理実習論を講ずるに先立って、地理学に就いて所懐の一端を語って曰わく、

本校の卒業生は卒業後往々在学中の学科の高尚に過ぐる事をかこ

つものあれど、余は思ふ、學術を研究せんとするものは、實際実用のみを重んずべからず。寧ろ迂遠なるが如き事をも学修するを要す。吾人もし当面に従事する仕事に対する知識のみを修得するを以て満足せば、事に当たつて常に全力を用い齷齪として些細の餘裕なきに陥るの恐れあり。されば学生時代には實用實際にのみ重きを置かずして、高尚迂遠なる事を修得するは、人格の養成にも必要な事なりと信ずる。

と「無用之用」を説いておられる(一九三六—一九四〇の高師においても、全く同様な論議がありながら、師弟ともども高きを持してよくつとめていたと往時が回想される)。中目覺はさらに、

今回の実習論は必ずしも中等教育者としての実習論ならず、この実習論はドイツの諸大学いづれにも行われざる所はなく、地理学においては勿論、法制、経済、歴史、人類学等の諸学においても行われざるはなし。殊に地理学の如き学問においては実習を行う事多きに従い、その研究法益々明瞭となるのみならず、斯学に対する諸大学に於ける実習は、研究室に行うものと野外に行うものとあつて専ら学生の工夫と思考に任す。

と述べている。かくの如きドイツの実習を下敷きにして、下記のように中目覺は実習論を構成している。

第一章 野外における実習(第一節をひと省略、五は小田内論文に見えず)

- 一、角度(水平角、垂直角)：各種器械を示しその用法を説明し、講習員実地で使用
- 二、距離、流水速度測定
- 三、高低、

- 四、気象
- 六、步測図
- 七、対景図

第二章 製図に関する実習

- 一、地図用文字
- 二、地図符号
- 三、地図複写
- 四、地図の縮小・拡大
- 五、透視図法一般
- 六、等高線
- 七、暈滯(げば)
- 八、濃淡など
- 九、著色
- 十、模型測量(アメリカのミシガン大学の地理教授ハーバートポップスの考案紹介)

第三章 地図上の実習

- 一、角度
- 二、距離
- 三、面積、経緯度
- 四、縮尺判定の方法
- 六、全景図演習
- 七、等量線
- 八、山脈の平均海拔
- 九、山の傾斜面
- 十、等刻地図など(五は小田内論文に見えず)

小田内通敏は三日目、第三時の講習会の様子を次の如く報じている。室は四室に分かれ、各室各班何れも要目に従ひて実習し、道路の断面図と全景図とをつくる班もあれば、地図の複写と鉄道の営業速度とを割り当てられたるものもあり。又求積器の使用に困じたものあれば、模型測量の面倒なるに閉口するものありき。実習の時は講師助手を始め、講習員に至るまで、何れもシャツのみとなりて活動し、何れも興味深げに立働くさまは、規則通りの講習会と自ら其の撰を異にせり。

と活発な講習風景描写をしている。

閉講式に中目覺講師は、「実習が予想以上の好成績を収めたる事、普通の講習の如く、講師のみ活動し講習員はただその講話を聴くのみなるに反し、今回は講師も講習員も協同一致して有終の美を済すを得たるを喜ばれ、今回の講習が幾分にも新しき刺激を与えたるをえば幸

甚し」と結ばれた。

地理学教授論と地理研究旅行について、「中目講師は実習論の外にドイツの地理学者キルヒホフ氏の『地理教授論』を譯述せられたるも時間足らず、その半にも達せざりしと、実習論中の第四章地理研究旅行が講述せらるる時間なかりしは講習員の遺憾とする所なり。」と小田内通敏は述べ、更に同氏は次の如く述懐している。

今回の講習会の主題たる「実習論並に実習」が講習員に最も清新なる興味と新しき研究心とを与えたるは、最も注目すべき事なりとす。余の如き今回の講習に赴きて、最も痛切に感じたるは、地理学の研究にはドイツ語の読解力と相応の数学の力が必要なる事なりとす。

広島高師の授業に就いて小田内通敏は次の如く述べている。

地理の時間は本科第一学年より第三学年を通して週五時間ずつにて、うち実習は一、二学年ともに一時間ずつ、第三学年には一時間を研究事項の指導発表に用ふるといふ。他の四時間にては、地理通論、地理特論等を教えらるるが、一般の学風は語学力（読解力）と研究法を鼓吹しておらるるが如し。以上五時間のほかに堀教授（法制経済学）が、二年、三年を通して一時間ずつ政治地理学を講せらるること。

以上が、中目覺の地理実習に就いての小田内通敏報告の概要である。これによつて、他では知られざる中目覺の講義・実習の内容の一端、さらに広島高師における地理学への配当時間なども知られる。すなわち、前第三表と比較するならば、学科課程より週一〜二時間余計に、

授業科目も新しいものを採入れていたことが知られる。第二章第二節において、私は一九一三年と一九一五年の地理授業科目について述べた（第5表、第6表をみよ）が、それよりも更に三年前一九一〇年の授業科目、中目覺の地理授業プログラム観がここに窺えて興味深い。文部省によつて予め敷かれた学科課程は、中目覺によつて的確な授業科目が組立てられ、新鮮味を持ち、それが継承されていく。

さらに、同報告の中で小田内通敏は、さらに興味深いことを報じている。

中目先生を自宅に訪問せし際、種々談話せられたる談話中、ドイツの地理学者間には、地質学より、人類学より、史学より、はた社会学より入れるなど、各方面なる故従つて学風特色各異なつて大に面白し。……人口五万人以上の都会には必ず地理学会があり、会員には地理学に興味を有する者みな入会し得るが故に、毎月の例会もなか／＼活気あつて面白く、実際問題なども出て盛大なり。……ドイツの地理学会の新思潮としては、民居の形式を研究する居住地理ともいふべきものあり。我が日本の如きも此方面に研究すべき新分野多し……などの事もありき。……多種なる学風、自由なる地理学会、居住地理、何れも我が国地理学会に対する好福音にあらずや。

小田内通敏は別の論文⁽⁵⁾で次の如く述べている。

明治四十三年八月、真夏の風の烈しい広島に、中目覺高師教授の地理学の講習を受けるにいたつたのは、同教授がドイツ文学を専攻されたのにも拘わらず、地理学に転向され、しかもヨーロッパ

パ留学を終へての直後であつたから、東京高師の山崎直方教授の講習に比べて、きつと特色があるだろうと思ひ、非常な期待をもつて出掛けていつたのであつた。……帰京に先ち、一夕、同教授を自宅に訪れ、率直に所感を述べたら、黙つて書齋に入り、大きなドイツ語の本を手にながら坐つて、左の如くいわれた。

君の考えている郷土学は、ドイツでは、このように発達している。しかし、高師の地理学の講習となれば、東京と同じようなことをしなければならぬから……。

私は、中目教授のこの答を聞いて豁然とした。

地理学者として成長していく小田内通敏に郷土学研究を勇気づけたのは、中目覺であつた。そして小田内は中目覺を高く評価し、記録に留めているのである。

二、地理科夏期講習会(大正三年)―地理巡検を取り入れて

一九一四年七月六日(七月二十五日)。中目教授の地理(二十三時間)、四宮教授の天文気象(二十時間)、仲佐教授の地質鉱物(十六時間)という構成。地理二十三時間の内容は次の如くであつた。

- 一、郷土地理 二、地理用器械 三、地理学術語 四、外国地名
- 五、秋吉台実地踏査 六、演習(四回)(図上及器械演習)

なお仲佐教授の講義計画の最後にも、秋吉台実地踏査があげられており、両教授共同授業とみられる(第四章第三節参照)。もっとも、この講習の中目覺の指導内容に就いては今のところ、これ以上の資料は見当たらない。

三、文部省主催・広島高師、中等教員夏期講習(大正七年の夏期講習)―中目覺地理学の本質論を窺わせる

中目覺「国民道徳の地理的要素」⁽¹⁻³⁴⁾は、上記講義内容の一部と考えられる。そして中目の地理学に対する考え方を最も率直に開陳した貴重な文献である。中目の所論の大筋をみよう。

日本には日本独特の道徳が必要であるという事に思い付いたのは、島嶋性に基づくものと思う。すなわち日本に国民道徳なるものが現れたのが、既に風土の影響と見てよい。ラツチエルは「政治地理学」で、風土的要素は無視できないと述べている。ラツチエルは、日英両国について、外国思想の侵入を恐れるのは島国的現象に過ぎない、しかし島国は外来思想を充分吸収し、之を咀嚼して我物とする能力を備えていると言っている。外来思想の輸入は少しも危険がないのである。私は外国思想の輸入がまだまだ不充分であると思う。唯半可通の輩が外国思想にかぶれるのは宜しくない。又一国とか一時代とかに偏すると害がある。独乙思想とか英国思想とかの一点張や、現代文は読むがギリシャ、ラテンは嫌だなどと威張っている輸入者は余り歓迎すべきものではない。公平な輸入者が必要である。

次に、少し具体的に道徳学者に読んで戴きたい二、三の参考書をあげてこの稿を終わりたいとして次の書物をあげている。ラツチエル(Ratzel, F.)の著書のうち「人文地理学」(Anthropogeographie)と『政治地理学』(Politische Geographie) ヘルテル(Herder, J. G.)の『歴史哲学論』(Ideen zur Philosophie der Geschichte der Menschheit)

モンテスキュー (Montesquieu, C. de S.) の「法の精神」(De L'Esprit des Lois)、『デモクラシー (Demolins, E.) 「如何にして通路が社会形式を作るか」(Comment la Route crée le Type Social)』、ブリュヌス (Brunes, J.) 「人文地理」(La Géographie Humaine)、『バックル (H. Th. Buckle) の『英国文明史』(History of Civilization in England)』、ハンチントン (Huntington, E.) 「文明と気候」(Civilization and Climate)。これらの書物の中ドモランとラッセルの「人文地理学」だけが二冊で、その他は一冊にまとまっている。三日に一冊読むとしても、夏休みの読物としては少し不足を感じる位である。私は道徳学者に一度夏休みの半分を割愛して、地理の方では自然と人類との関係を如何に見ているか参考に供せられたいと思う。

小さい論文ではあるが、中目覺の地理学に就いての考え方、勉学がよく現れている。「地理的要素を説くのは地理学であるが、地理学とは如何がなる性質のものであるか」と問い、これについてはヘットナー博士の説をあげ、「昔も今も地誌が地理の本体であるということである。……地誌とは何かと云えば道中記や旅行案内の如きもので誰にも了解できるものである。」とまで極言している。「地理の本体たる地誌が右の通りである様に、広義の地理学の中に含まるべき地理的環境の人類に及ぼす影響も昔から学者の論ずる題目であつて、實においてさほど変化がないかも知れぬ。……現代の学者は各々専門があつて其の専門研究に日も尚ほ足らざる有様であるから、専門外の書を手にするなどということはできぬことと思う。これらの学者でも新聞は読むと思う。この新聞が少し多かつた位に考えれば地理的環境論を読む時

間はあらう。島嶼と人文、山地と人文、気界と人文の関係も読んでいただきたい。新聞か小説を読む程度に通読していただきたい。私もラッセルの人文地理や政治地理は、小説を読む様な積もりで処によつては三度も四度も読んだ。」と中目は坦々と述べている。そして前述したような独佛英原書の通読、速読をすすめているのである。

この記述の節々に多面的、学際的研究をした偉才中目覺の姿が窺われる。この論文ほど、中目覺の地理学に対する考え方を端的に述べているものはなう。A. ヘットナーの思想が *Die Geographie, ihre Geschichte, ihr Wesen und ihre Methoden*, 1927 (『地理学、その歴史、本質、方法論』) にまとめられるより八年前に、ヘットナーの思想をめぐりに汲み採つての論述である。広島高師で A. ヘットナーの主著(一九二七)が後継教授によつて地理同好者相手に、あるいは補助教材として読まれ、地誌の講義の軸となつていたことを、一九三六年高師入学の筆者は、今改めて感じ、中目地理学の伝統は生かされていたことを知る次第である。

第四章 調査研究業績—先駆的研究・雄大な仮説

教授時代における中目覺の著作を発表年月順に示したのが第7表で、三十七篇ある。そのうちから研究分野、題目ごとまとめて論述しよう。

第7表 中目覺 著作一覧

教授時代 (1899~1921)

作成：石田寛

Jan. 30, 2000.

0. 金沢 (四高教授) 時代およびそれ以前

I - a. 広島高師教授時代

- I - 1. 「羅馬時代の維也納」、『校友会会誌』、第八号、広島高師、1907年
- I - 2. 「バルカン旅行記の一節 (一)」『会誌』(広島高等師範学校地理歴史学会) 第1号、1910年
- I - 3. 「バルカン旅行記の一節 (二)」『会報』(広島高等師範学校地理歴史学会) 第3号、1912年
- I - 4. 「地図に現れたる北海道及樺太」『尚古』、広島、第50号、1912年、pp.16-29.
- I - 5. 「バルカン旅行記の一節(三、完)」『会報』(広島高等師範学校地理歴史学会) 第4号、1913年
- I - 6. 「樺太の薩満教」『学校教育』第1巻・第1冊 (通巻第1号)、1914年1月 pp.42-47.
- I - 7. 「樺太土人の話」史学研究会編『史的研究』富山房、1914年9月、pp.91-124.
- I - 8. 「樺太諸民族の言葉」『芸文』、第5年・第11号、京都、1914年11月、pp.85-89.
- I - 9. 「鹿児島宮崎旅行談」『尚古』第60号、1915年、pp.18-42.
- I - 10. 「氷河問題に就きて」『史林』2巻1号、京都、1916年1月、pp.67-73.
- I - 11. 「秋芳附近の諸現象」『地歴画報』1巻2号、1916年
- I - 12. 「東亜旅行談」『会報』(広島高等師範学校地理歴史学会) 第6号附録、1916年5月、pp.1-43.
- I - 13. 「ニクブン族の名称」『芸文』第7年・第10号、1916年10月、pp.41-51.
- I - 14. 「樺太の土人」『学校教育』第3巻・第12号 (通巻第37号)、広島、1916年10月、pp.59-71.
- I - 15. 「現行トングース語の単語比較」『芸文』第8年・第2号、1917年2月、pp.13-17.
- I - 16. 『ニクブン文典』三省堂、1917年2月、81頁
- I - 17. 『樺太の話』三省堂、1917年6月、189頁
- I - 18. 『オロッコ文典』三省堂、1917年8月、165頁
- I - 19. 「氷河と飢餓」『尚古』68号、1917年、pp.1-35.
- I - 20. 「我国に保存された古代土耳其文字」『尚古』71号、1918年2月、pp.1-6.
- I - 21. 「鞆鞆語基誌について」『尚古』72号、1918年5月、pp.1-13.
- I - 22. 「北海道手宮洞穴の鞆鞆語基誌につきて(上)」『歴史と地理』1巻6号、1918年4月、pp.1-7.
- I - 23. 「北海道手宮洞穴の鞆鞆語基誌につきて(下)」『歴史と地理』1巻7号、1918年5月、pp.9-15.
- I - 24. 「樺太の植民」『歴史と地理』2巻3号、京都、1918年9月、pp.93-98.
- I - 25. 「手宮の古代文学を讀破するまで」『北海道タイムス』1918年10月
- I - 26. 『土人教化論』岩波書店、1918年10月、119頁
- I - 27. 「東部西伯利の戦場」『尚古』74号、1919年1月
- I - 28. 「中亜の氣候変動と我国への影響」『尚古』75号、1919年3月、pp.1-9.
- I - 29. 『渡欧日記』非売品、1918年、63頁
- I - 30. 「仏国中学校の地理教授要目 (上)」『歴史と地理』3巻1号、1919年1月、pp.84-87.
- I - 31. 「欧州戦場と天候 (上)」『史林』4巻1号、1919年1月、pp.86-93.
- I - 32. 「欧州戦場と天候 (下)」『史林』4巻2号、1919年4月、pp.145-151.
- I - 33. 『小樽の古代文字』広島高等師範学校地理歴史学会、1919年、36頁
- I - 34. 「国民道德の地理的要素」『東亜之光』(東亜協会) 14巻、1919年、pp.13-18.

I - b. 松山高校教頭時代

- I - 35. 「仏国中学校の地理教授要目 (下)」『歴史と地理』4巻6号、1920年、pp.85-93.
- I - 36. 『アルプス山とライン河』非売品、1920年、74頁
- I - 37. 『地理的刺戟』非売品、1921年、23頁

第一節 北方先住民の研究—フロンティアに挑む

中目覺がヨーロッパから帰国後発表した論文三篇は、ヨーロッパ留學地に関するもの、そして歴史地理ないし地誌的なものであった。それに次いで著したものは、北海道・樺太に関するもので、高師地歴学会の例会などでは既に発表していたが、やがて論文として次々と四篇を公表する。^(I-4, 6, 7, 8)

樺太・北海道を舞台にした民族、言語、生活に就いての中目論文は最もユニークなオリジナルな研究である。薩滿教(シャーマン教)の研究、北方少数民族言語の研究と、樺太原住民の生活、小樽の古代文字などがあり、言語・宗教を中心とした学際的・通文化的研究であり、さらにいうならば我々が今日追求している地域研究・地理学である。

日露戦争後日本の帰属に帰して間もない樺太に乗り込んで、先住民の言語を習得してその生業を調査するだけでなく、オロツコとニクフン二言語の文典まで刊行している。頑健な体格、卓抜した言語学的力量があればこそその成果、業績である。先駆的研究であり、樺太先住民の生業を中心とした民族地理学的研究は今日もなお定本的文献となっている。

一、小樽市洞窟壁面陰刻解読

日本の学会のみならず、一般的にも注目を集めたのは、小樽市洞窟壁面陰刻の解読であった。そして二つの文典はヨーロッパ言語学会に反響を呼んだ。この点は後日別稿において論ずることにする。

学会、読書界のみならず、観光、土産物まで大きな波紋をおこした古代文字解読について、やや詳細に述べよう。中目覺は北海道小樽市

手宮洞窟の壁面陰刻を古代土耳其文字と読んだのである。^(I-20) 中目覺が手掛けるまでの主な経緯を『手宮洞窟シンポジウム』を援用して述べよう。一八六六年石工の長兵衛が洞窟、そして何か刻まれていることを発見する。一八七九年イギリス人 John Miln (ジョン ミルン) がここを訪れて驚き、イギリスの学会誌『アジア協会誌』(一八七九)に発表し、これら銘刻のうちいくつかはルーン文字の m に類似している点に注目してもよい。……これらは古代中国文字に類似していると

も考えられると云っている。中目がかくも重要な洞窟を最初に訪れたのは一九一二年四月で、「アイヌ古代文字」(傍点石田)という絵葉書をもとめて知人に贈っている。その翌一九一三年、鳥居龍蔵が突厥語であるか爾慎語(靺鞨語)であろうが、おそらく後者と考えられると画期的論文を発表した。

その後中目は高師の同僚教授山下寅次文学士から借りた W. Radloff: *Die altirischen Inschriften der Mongolei* (ラドロフ著『蒙古に於ける古代土耳其文碑銘』) の口絵にのせられた手宮の彫刻文字と蒙古の古代土耳其文碑銘に惹かれる。この書物に刺戟されて、鳥居論文から五年後中目は写真6の如き文字を次のように遂に解読に成功する。^(I-20)

古代土耳其文字



写真6 古代文字
『尚古』71号より

……我は部下をひきぬ、おほうみを渡り……たたかひ此洞穴にいりたり^(I-21)

続く論文で、文字は古代トルコ文字だが、刻んだのは言語はゴルデ語もしくはオルチャ語で考えることができる。そしてそれを刻んだのは、鞅鞅人(日本古代史でいう肅慎^{みじん})であると中目は述べた。そして、

嗚呼 肅慎の老翁よ よし汝が移民計画は失敗に終わつたにせよ。優秀民族の国に植民するのは不可能事であるを思ひ、恨む勿れ。老翁よ汝の祖国は影も形もなく消え失せ、其の歴史だに朦朧たるの時に当り、汝の事は世界の大帝国の記録に残り、又汝の墓誌も讀破せられたるをよろこべ。老翁よ以て冥すべし。エンデリの神は永に汝の霊を護るであらう。と、いささか感傷的に中目は結んでいる。

「大言語学者が、しかもその前に大人類学者が、打揃つて発表しているのですから、これらの与えた影響がどれほど大きかったことか」と『手宮洞窟シンポジウム』は述べている。国指定史跡への経緯を見ただけでも知られよう。すなわち斎藤忠は次の如くのべている。⁽²⁾

中目の考察は興趣に富む推理であり、トルコ文字としての解讀もまた一篇の詩であつた。これは一部の人々に興味をもつて迎えられた。……中目が興味ある説を発表した大正八年には、その十二月に北海道道会は十三名の議員の建議を受理した。大正八年、史跡名勝天然記念物保存法が公布されると、同十年には「手宮洞窟」の名で史跡に指定され、国の保護の対象となつた。

中目は、大反響を呼んだ前出二論文^(I-22, 23)に関連論文一篇^(I-28)を加えて『小樽

の古代文字^(I-33)』として大正七(一九一九)年に広島地理歴史学会から刊行する。この第三論文は氷河研究、気候変動に重点をおいて民族移動を研究したもので、地理学者中目覺の面目躍如たるものがある。これに就いては、後に自然地理調査研究の項で更に論評する。本書に収録された三篇は、漢字を始めとして東洋諸言語をめぐりこなす言語学者中目覺ならではの卓見で、世界の檜舞台での論戦さすがと感心させられる。この本は七年後(一九二六)再版される。⁽³⁾

中目覺説が全国に鳴り響くくらい普及してしまつた後、昭和十一(一九三六)年に中島利一郎という人が「手宮文字の謎」で反論しても、これは殆ど影響力はなかつた。「結果的には鳥居龍藏、中目覺が発表したことが全国に鳴り響いていました。」と『手宮洞窟シンポジウム』は述べている。

この昭和十一(一九三六)年は中目覺が十六年間勤めた広島高師を離れてから十七年目(大阪外語校長を退いた翌年)のことであつたが、広島高師では誰云うこともなく語学の天才、異色の地理教授中目覺の古代文字解讀の話と同時に、壁面陰刻は古代文字でなく後世の偽作だという説も聞こえ、私は複雑な気持ちになつた。その当時のことが、想起される。

再び、『手宮洞窟シンポジウム』によつて論をすすめるよう。一九五〇年隣町余市^{よいち}で、手宮と同種の彫刻をその壁面に持つフゴツペ洞窟が発見され、その壁面陰刻の研究がすすめられ、金田一京助らも支持していた(一九三〇年)手宮陰刻偽作説が、名取武光によつて一九五〇年に完全に否定される。斎藤忠は一九六三年に「鳥居龍藏によつて文

字とされ、中目覺によって判讀され、手宮の古代文字として人口に膾炙するに至った。しかしながら中には、これに対して批判的な意見を持った人もあった⁽²⁴⁾と鳥居、中目らを評価している。しかし、文字説に対する批判が強くなっていく。文章化された文字ではないとする説が主流となる。手宮洞窟シンポジウム司会者菊池俊彦は次の如く述べている。

私は、文章化された文字ではないだろうという風に考えます。ここに御列席の先生方は多分そうお考えだと思えます。……ただし全く文字的なものでないかという点、これは問題があると思えます。……エジプトの象形文字にしろ、中国の漢字にしろ、もとは何等かの形・姿を、絵のように表してそこから文字が出来ていくわけですから……文字になるべき段階のものでないと断言することは出来ないと思うのです。

これによってみるに、このシンポジウムも文字説を完全に否定し切っていないのである。中目説を完全否定し切れないことをシンポジウムの司会者自身が述べている。

中目覺の提唱した「文章化された文字」説の否定論者で、この会を組織した地元の研究者石川直章の感慨を聞こう。

「文章を構成する文字」という意味では否定される、ある意味を持った記号であったと理解されよう。中目覺の研究の最も重要な部分でもあった北海道とアジアの集団関係については、形を変えながらもほぼ支持されているといつてよいと思われま

石川書簡は記号という表現を以て、結局は菊池俊彦氏とほぼ同意見と

読みとれる。そして中目覺仮説の後半、民族来住を積極的に支持し、中目論文の現代的意義を評価しているようである。

二、樺太先住民の調査研究

広島時代の前記研究のいくつかを収録した「樺太の話」⁽¹⁷⁾にふれよう。最も集中的に現地調査したのは、大正元(一九一二年)、大正二年の樺太調査と大正四年露領沿海洲調査である。前者は樺太庁の囑託、後者は文部省の海外出張によるものであった。樺太の先住民は北緯四九度以南にアイヌ、それ以外にオロツコとニクブンが住む。アイヌは犬を、オロツコとニクブンは馴鹿(トナカイ)を用いるので棲み分けができていた。アイヌは約一五〇〇人もいるが、他の二つはきわめて少数。ことにニクブンはオロツコやアイヌの居らぬところにすむ。先住民の言語を調査すれば、其外の風俗、習慣、伝説或いは宗教上の思想などというやうなことは、副産物として段々容易く分つて来るといふ考えの下に、まずオロツコから始め、大正六(一九一七)年には前記のごとく、それぞれを刊行したのである。この二民族言語調査・文法書作成を軸に、生活・文化、そして和人との接触、日本及び諸外国国学者の研究史の上に、自分の研究を位置づけている。「私が先年洪国のブタペストに滞在して居りました時、毎日大学図書館へ行って東洋に関する書籍を読んでいる中に、ピエルベルジュロンという人の編纂した『十二世紀より十五世紀に至る紀行全集』という本を見付けました。……黒龍江下流は不明であるため点線で示して……。是は私が羅馬に留学中に古本屋で探し出したのを此処に持って来て居りますが、これはア

ムステルダムで出版されたものであります。之は京都大学の地図と大きさが違うだけで、内容は全く同一であります……」。

留学中の勉強成果が樺太の先住民族の研究に十分生かされている。もつともこの「樺太の話」は、樺太に関する講演及び論述を収録したもので、二つの先住民族オロッコ、ニクブンの言葉の文法書は含まれていない。この研究を読んでいると、中目覺の留学中の研究室、図書館での勉強振りや古本屋での資料蒐集へのひたむきな姿が見えてくる。

文法書の刊行。これは中目覺が最も精魂を傾けたものであり、「オロッコ文典」^(I-18)序文の一部を引用しよう。

予は大正元年及び二年の夏、樺太幌内河畔に赴きて土人の言語調査に赴けり。而して曩に「ニクブン文典」^(I-16)を著は志、今又「オロッコ文典」一卷を作る。稿成りて之を一読するに微細の語法猶ほ尽さざる所あり、語詞の採集僅かに一千餘言にすぎず、時日少きの致すところなりと雖も、此の如くにして学界に公にするは遺憾極まりな志。然るに増補訂正の如きは身親しく彼地を踏むに非んば之を為すこと能はず。内外の書を涉猟すると雖も参考に資すべきものは極めて少志。予は唯だ今より後、小壮学者が堅忍不拔の精神を以て精緻の研究を遂げ、オロチョン文法を大成さられんことを希望するのみ。

大正六年五月二三日

広島にて

中目覺識

研究者としての直向な謙虚な面が出ている。

大正六(一九一七)年は、中目覺にとて収穫の多い年であった。二月に「ニクブン文典」^(I-16)、六月に「樺太の話」^(I-17)、そして八月にこの「オロッコ文典」^(I-18)の上梓を見たのである。そして大正七年、八年と単著を続けて出版する^(I-26, 33)。大正七年に出した「土人教化論」^(I-26)についてはその「緒言」を掲載しよう。

緒言

敷香から幌内川を渡りて五葉の松の林の中に入ると、近頃開いた一直線の細道がある。之を通り抜ければ、北の方は川まで切り開いた砂原の中に、幾棟かの木造家屋が並んで居る。即ち鈴木商会の工場で、私は大正二年の夏、事務員宿舍内の八畳に陣取って先住民の言語研究に従事したのであった。前年の夏着手した仕事を続けて居った訳である。先住民の半ば詩的な生活状態を二夏も見て居ると、漫りに想像力が逞くなり、シャトーブリアンのアダラ・ルネーを想い出し、エジプト、バルカンの曾遊を想い出し、果ては頭の中に未だ残って居る世界歴史が薄ボンヤリと浮かんで来る。何となく筆を執りたくなり、同年七月三十一日から研究の余暇に腰折れの歌の如くに綴って、八月二十八日に及んだのが即ち此一編である。元より参考書とはなく、思い出づるままに書きつらねたもので、大したものではないが、樺太記念として其まま筐底に藏めて居た。其後雑誌に原稿をねだられた時などは一部分を「異民族に對する教育」とか「樺太の土人」とかいう題目で出したこともある。

再び樺太へ行って言語研究を完成するの機会も無さそうであるから、原の形のままで多少の訂正を加え、梓に上することとした。「土人教化論」というえらい名を付けたが、元より樺太の松林の産物に過ぎぬものである。読者諸君、どうか其積りで読んでいただきたい。

大正七年十月十七日

広島に於いて

著 者 識

「前編」と「後編」から成り、「前編異民族の教化」は民族 (Ethnological) と国家 (Staat) をキーワードに古今東西の興亡を広い見聞・体験と博搜・読破した文献からおのずからしみでたこくのような好論であり、中目覺の史観・世界観が遺憾なく窺われる。「後編・樺太北部民族の教化」は、アイヌ人、ニクブン人、オロッコ人、キリーン (奇鄰) 人、山丹人の五民族とその教化を論じたものである。もつともオロッコ、キリーン、山丹の三民族はトングース族 (エニセイ河の河口附近から樺太の間に散在) に属し、その民族誌 (生活、言語、文化) を、樺太および沿海洲での現地調査に基づいてみごとに書きあげている。そしてその教化の具体策まで論じている。類稀な行動力と鋭い洞察力、しかも現地人にとけ込む社会性・人間的魅力があったからこそその産物といえよう。新しい逍遙学者¹⁾ ならではの著作である。続く翌一九一九年に古代文字に関する諸論文が単行本にまとめられて公刊されるにいたることは既述の通りである。

なお、前記「ニクブン文典」、「オロッコ文典」は、日本国内よりむ

しろ外国で大きな反響がある。これに就いては別に論ずる予定である。

第二節 旅行談 (記) ・地誌

— 既成学科の枠を越え、豊かな発想

既に述べたごとく (第一章第三節)、地理の本体は地誌であり、旅行記などで誰にも理解できる形で表現されるのがよいというのが、中目覺の考である (第三章参照)。

中目覺の著作の第二弾が「バルカン旅行記の一節」^(I-2) であり、中目覺の教授時代著作三十七のうち、旅行記 (談) が六篇 (I-2、3、5、9、12、29、36) うち一つは松高時代)。「バルカン旅行記の一節」^(I-2、3、5) は現物未見につき、ここでは触れない。一九三二年「バルカン旅行記」⁽⁴⁾ として発刊されるので、別稿でふれることにしたい。さきに高師の一卒業生が「会誌」で言及した下記旅行談から論じよう。

一、「鹿児島宮崎旅行談」^(I-9) — 断層・火山と神話高千穂

留学から帰った明治四十 (一九〇七) 年・翌四十一年、翌々四十二年と三ヶ年、休暇を利用して三回に亘り南九州の鹿児島・宮崎を徒歩で調査し、鹿児島宮崎の地形を複式桶状断層の結果形成されたと提唱している。そして中目覺は日本神話に出てくる天孫降臨の地高千穂は鹿児島県の霧島火山ではなく、日向の高千穂であるとしている。天孫族は移住し霧島山噴火の見える所に居住し、出生した皇子の名は霧島火山の噴火の火勢に従ってホテリノミコト (火照命)、火須勢理命、火遠命などと命名された。そして霧島噴火の災害が天孫族の大規模

移動を促したとする。実に雄大な仮説である。皇紀二千六百年祝典に向かつて鹿児島、宮崎両県の高千穂論争は激しさを加えたが、太平洋戦争終結とともに、「高千穂」は日本国民の意識から遠ざかっていく。とはいふものの高千穂論争はなおも続いている。ちなみに千田稔は最近、ユニークな見解を発表している。³³⁾ 新井白石、本居宣長以来長年に亘って続く高千穂論争史のなかにあって、中目覺の所論は、実に大胆・雄大な仮説で注目すべきものである。大正三年中目のこれを聴いた高等師範学校の一卒業生が驚き、「他の分野に侵入して羨いままに論じ……」とみたのも、明治末・大正初年の学界、教育界からみて当然といえは当然のことであろう。

二、「東亜旅行談」^(I-12)

— 留学時代の恩師、先師の中国研究に想いを馳せて

これは大正四(一九一五)年八月四日から二十九日まで二十五日間の旅行談である。経路は浦潮(ウラジオストーク)、ハルビン、旅順・大連、青島、以上四大都市の観察で、フィールドに来て中目は恩師、先師たちに想いを馳せている。日本が満鉄本社を大連に置いていることに関して次の如く云っている。「これは一つの理由であろうが、今一つ根本的な国民性に基づく理由があると思う。それはなんということであるかと云うに、日本のような海国は大陸を恐れる傾向がある。此事に関して独乙ライプチヒ大学の故ラツチェル博士がその著者の中に於いて論じた事がある。抑海国は海国的に発展することを好み島とか大陸の海岸とか丈けを占領しようとかかる。……又大陸国が衰える

際には、先ず島々を失うと同博士は論じて歴史上色々の例を引いている。私も博士の説に真理があると思う……」と、ライプチヒ大学教授 F. Ratzel 博士を出している。

青島の項で、「大連から二十時間許りで着けるのである。此の青島は、明治三十八年に死んだ独乙ベルリン大学の地理学教授リヒトホーフェン博士が曾て支那を調査した結果将来有望な処であると唱えたのに基づいて後独乙政府が租借地として選んだのである。夫れで青島とリヒトホーフェン博士とは密接な関係がある。私はリヒトホーフェン博士に会ったことはないが、多少の関係がないでもない。私が維也納大学において二年以上薫陶を受けたペンク博士はリヒトホーフェン博士の後任者として伯林に転任した。独乙大学においては教授が去る時には告別式の代わりに告別講演と云うものがある。告別講義には教授が礼服用で講壇に立ち講義の結末をつけるのである。告別講義のあつた日の夜送別の宴会を催うのが普通である。この告別講義や送別会に出るのは総て礼服用という事になっている。私なども燕尾服用で出席したのを記憶している。其から又博士の薫陶を受けた弟子一同は写真を集めて写真帖を作り之を博士に贈呈した。即ち明治三十九年の春で今や將に十年に垂んとして居る。即ち私はリヒトホーフェンから云うと其の後任者の弟子という関係がある。この点から博士に対して多少の敬意を払う義務があると思う。」と述べている。この文章から中目覺の勉学態度、師に対する表敬の情が伝わってくる。

第三節 自然地理調査研究

中目覺の留学から帰った直後三年間の野外調査は、断層、火山など自然地理関係のものであったことは前の節で述べたところである。

一、カルスト地形調査

オーストリア・ハンガリーのカルスト地方の地形を観察している中目覺が、日本の「カルスト地形」に関心を持ったのは自然の成りきである。大正元（一九一二年）年、学生を連れて六日間愛媛県大野原カルスト及び羅漢穴の調査をし、さらに山口県秋芳台・秋芳洞の調査を学生とともに一九一四年に実施、その際中目の作成になる秋芳洞地図が、この石灰洞地図の第一号となる。⁽¹⁰⁾ 中目は夏期講習会でも受講生を連れて秋吉台へ地理巡検をしている。「日本エスペラント運動人名小事典」（田中貞美ら編、日本エスペラント図書刊行会、一九八四年）は中目覺について「自然地理学を研究、秋芳洞および秋吉台カルストの調査をした……」と記載されているように、日本における地形学開拓者の一人である。

二、氷河・気候変化に関する調査

この分野に関する中目の著作としては氷河地形、日本の氷河問題を論じたもの一篇と氷河気候、気候変化の二篇があるが、中目の関心は氷河地形そのものよりも、氷河気候の方であった。ブリックネルやハチントン⁽¹¹⁾の学説を紹介するだけでなく、それらを検討した上で援用し、日本の気候変化を論述しており、中目覺は日本における気候学研

究史上でも、重要な人物といつてよからう。

(一) 氷河地形に関するもの

中目の「氷河問題に就きて」⁽¹⁰⁾を紹介しながら論述しよう。大正二（一九一三年）、ヘットナー（A. Hettner）博士一行が来日し、梓川の畔に於て搔痕を有する岩塊を発見してから氷河問題がやかましくなってきた。⁽¹⁰⁾ 中目はその翌大正三年から地理の講義で、飛騨山脈の氷河遺跡の研究には梓川より高原川が重大な関係を有すると述べていた。梓川の上流域は日当りのよい東斜面である。若しこの地域に氷河の遺跡があるとすれば、降水量の多い日蔭になる神通川上流高原川流域には一層氷河遺跡が明らかでなければならぬと考えられる。かくて、一九一五年夏高師地歴の修学旅行に、この地を選んだ。一行は富山―笹津―庵谷―茂住（二泊）―神岡鉦山―船津―高山―平湯（二泊）―乗鞍岳―番所―大野川―梓川―島々と氷河遺跡巡検を行なう。船津から高山に出る。小八賀川にそって平湯に向う。小八賀川にも氷河が発達していたことを発見。一行中の某が大なる搔痕石を発見する。平湯に一泊して乗鞍岳へ登る。東側大野川の谷を下る。大野川という集落の西の方すなわち上の方に番所原というのがあつた。是が即ち氷河の堆石で出来た起伏地で十余年前旅行したオーストリアのスタイエルマルクへでも行つた様な気がした。多くは端堆石で出来ている地形である。この堆石は大野川の右岸までも広がっていたらしいが氷河退却の後には此原の両端を川が流れるようになって、川は今では深く食い込んでいゝ。しかし其岸の一部は堆石であるから崩れ易い。何ヶ所も崖の崩れた處がある。是は五万分の一の地形図にも示してある位である。即ち最近

の水期は此大野川(標高一三〇〇m)の辺で終ったものであるということが出来る。梓川の谷を流下して山麓七〇〇mの高原まで及ぶ氷河作用を中目は推定した。小川琢治、田中秀作(一九一四)の低位置氷河説は、大関久五郎(一九一四、一九一五)による反論が行われていた。中目の本論文は低位置氷河説を支持している。

ちなみに、中目一行は梓川を下り先輩山崎直方が氷食礫だとしてヘットナー石(Hettner Stein)と一九一三年に名付けた石を一九一五年観察する。ちなみにA.Penckに学んだ兄弟子たる山崎直方同様、中目も、低位置氷河説をとったのである。

(二) 氷河気候—気候変化に関するもの二論文

その第一は「氷河と飢饉」(一九一七)^(I-19)である。降水量の少ない中亜における気候変動(後篇)と多雨地日本における飢饉、気候変化(前篇)を論じた此の論文は、中目覚がウィーン大学で学んだところを基礎にして論述したスケールの大きい好論である。

日本の地理学界では最近氷河問題というものが八釜しくなりましてから、私は氷河のことを申し上げ、それから我国に古来時々起こった飢饉の中で温度の低かったため五穀がみならずして起こった飢饉と氷河との間に一種の関係があると思われまますから夫れに就いて申し上げます。

ブリュクネル博士の気候変動三十五年周期説は、太陽の表面にあらわれる黒点と密接な関係があるとする新説などによって広く支持されている。氷河時代の温度変動の最大の浪たる氷期は数万年ないし数十万年に一度来る処のものである。かくの如く温度

は大浪小浪を打ちつつ進んでいくものであります。

以上恩師(この道の最高権威者)の説を披露しましたので、我が国に於ける飢饉について、御話を致し氷河と関係のあることを申し上げます。

と、日本の気温変化、災害、飢饉を、古文獻、記録から整理し、さらに

右に述べた年の前後には平年より雨が多かつた様に思われます。

これによって大体西洋で雨が多かつた時は日本でも雨が多かつた様に思われるのであります。

中目は議論を積み重ね、次の如く結論している。

一、ブリュクネル博士の説く気候変動は我国においても明瞭である。

二、右の気候変動の周期を三十五年とするのは当らない様で、三十年が正当かと思う。少なくとも我国においては周期三十年と見れば諸方面の現象が一致する。

恩師ブリュクネルの説を更に発展させ、論を進めているが議論が細くなるのでここでは割愛する。

その第二は「中亜の気候変動と我国への影響」^(I-28)である。地球が段々乾燥化していくとするイギリスのグリゴリ博士などの地球乾燥化説に対して、米国のハンチントン博士などは、中央アジアの気候は漸次乾燥に向うが、その間に脈動している。故に過去における乾期と温期が交る交る現れた。そして之がカスピ海の水面などにも影響を及ぼしたと説いている。中目はウィーンで共に東アルプスの氷河を調査した旧

友ハンチントン博士の脈動説に賛意を表する。

ヘロドトス、ストラポーンは民族移動を論じてはいるが、その真因を述べておらぬ。さて草原地方で其所の住民が他へ移住するという事実がありとせば西、西南のみならず東の方へも向うべきである。ハンチントン博士は「文明と気候」の中に、中央アジアにおける乾湿の変遷を研究して之を曲線で示し、尚ほ説明もしている。之によれば紀元後に於いて最も著しい乾燥は、西紀六五〇年と一二五〇年とを中央とする時期である。すなわちその前後数十年間は中央アジアが大いに乾燥し、その絶頂が六五〇年と一二五〇年に当たるといふ意味である。私（中目）は他の乾燥期についてはまだ調べて見ないが、此の二期には中央アジアの活動が東方に向かつて大いに影響があり、わが日本まで反響があつたと思う。

六五〇年前後の時期は、支那では隋から唐初に当たる。この時代には絶えず突厥との交渉がある。……突厥が絶えず支那に圧迫を加え、かつ十万人内外の突厥が支那領内に移住していた。満洲方面へも影響があり、突厥と靺鞨人との接触があつた。靺鞨人は自分の言語を写すのに都合がよくそのうえ漢字に比して簡単な突厥文字を学んだものと思う。この突厥文字を習得した靺鞨人が西方からの圧迫によって、或者は遂に海を渡つて日本に來り、齊明天皇の朝に比羅夫の厄介になつたと考えられる。斯く考えれば古代土耳其文字即突厥文字を使って書きあらわした靺鞨語が小樽に残っているということも説明できる。

議論はさらに続くが、割愛したい。この論文は既述の如く、小樽の

洞窟壁面陰刻とも密接な関連があり、すでに関述したところである。

〈付〉地理教科書編纂、地理教育

中学校、高等女学校の地理教科書は、明治四十四（一九一一年）七月に文部省訓令、教授要目が公布されたのを機に種類も増え、内容も充実する。理学士山上万次郎、理学士山崎直方らは早くからの教科書執筆者であつたが、中学校生徒数の増加、明治四十四年の教授要目改正を機に新規に地理教科書の刊行を企画する出版社、新しい執筆者が出現した。文士中目覺は、理学士ないし理学畑の人が圧倒的多数をしめるなかにあつて、異彩を放つたものであつた（三省堂刊）。

中目覺はただ教科書メーカーではなく、下記著作にみられるように教科書、地理教育の研究をもしている。

「地理の教科書」を講じ（大正六年、夏期講習会）、⁽²⁾「フランス中学校の地理教授要目」を紹介している。^(1-30, 35)しかし、大阪外国語学校就任の年に、教科書から手を引く。このテーマはいつれ機を改めて論じたい。

〈エピソード〉人生転機を企つも

大正八（一九一九）年、中目覺は突如辞表を提出して郷里仙台へ帰り、子供の転校手続きも済ましたものの、文部省は辞職を認めてくれず、「今の学校が嫌なら松山へ行つてくれぬか」ということで、市長への転機はならず、広島高師から新設松山高等学校教頭に六月二日転任する。文科・理科の二学科制になつて最初に入学した博・地生徒（七名）が卒業して（三月二十五日）約二ヶ月後、中目覺も広島を去つたのである。

第五章 松山高校初代教頭—教育行政官階梯第一歩

一、地理学・ドイツ語教授—教育に情熱

大正九(一九二〇)年四月十五日設立記念祭に、力自慢の学生、教官二十名によって砲丸投げが行われ、中目覺は出場、入賞こそしなかったが⁽³⁶⁾おどろくべき体力で、よく教官、学生に打ちつけていた(写真7)。

若手教授を集めてフランス語の講義⁽³⁷⁾をするなど積極的であった。担当科目地理学とドイツ語を教える。卒業生の思い出に、「中目覺先生(教頭)、堂々たる体躯の偉丈夫でその地理は地政学的な講義で印象的なものがあった。先生は英、独、仏のほか数ヶ国語に通ぜられ、大阪外国語学校の創立に当たりその校長となられ、二学期一杯で松高を去られた⁽³⁸⁾」とあり、名講義が惜まれている。



写真7 松山生と高縄登山

中央白ズボンが中目覺教授
『暁雲こむる』(1988) (日野尚志提供)

社会教育への関心が深く、文部省から大正九年度社会教育講師を任ぜられている。

二、好著『地理的刺戟』⁽¹⁻³⁷⁾の刊行

本書の内容は大正十(一九二二)年五月、宮崎県下中等学校地理教育協議会での講義が東京日々新聞に三、四、五、六、十二、十三、十四日と七回にわたって連載されたものを取纏め一冊子にし、出版したもの(非売品)である。風土と文化、変化と刺激、陸界・気界における刺激性などについての欧米諸学者の研究を紹介し、さらに身近な例をも示しながら講述している。ラツチェル(F. Ratzel)、ハンチントン(E. Huntington)を大きく取採っていることはいうまでもない。

④ハンチントンの *Civilization and Climate* の日本語(エルズワース・ハンチントン原著、田中萃一郎序、間崎万里訳『気候と文明』中外文化協会、一九二二年。ハンチントン著、間崎万里訳『気候と文明』岩波書店(岩波文庫)、一九三八年)が昭和初期旧制高校生に愛読され、哲学者和辻哲郎(一八八九〜一九六〇)の『風土—人間学的考察』(岩波書店、一九三五年)が知識人の大きな関心を喚起するよりかなり前のことであった。

地理的環境の人類に及ぼす影響、すなわち環境論は地理学の中心課題である。中目覺が、これを真正面から取り上げたものが三篇ある。第一は既述「国民道德の地理的要素」⁽¹⁻³⁴⁾(一九一九年)であり、ここに論じた『地理的刺戟』⁽¹⁻³⁷⁾(一九二二年)は第二弾であり、風土論として、私は高く評価するところである。この種のものとして中目覺の第三著は、『気候と歴史』⁽³⁹⁾(一九三二年)である。これに就いては別の機会

において論評する予定である。

結 語

エリート中目覺なかのめあきらの教授時代の教育活動と研究業績を觀てきた。アルプス登山、アルプス紀行文、大きな家を建てて学生に開放して教育するなど、すべて日本人としては最初のこと、珍しいことを中目覺なかのめあきらはしていた。日本で二番目に早い高等教育地理プログラムを作り上げた。文部省所定の学科課程（とそれに割り当てられた時間数）を増幅（週一〜二時間）し、地理通論・特論の内容を工夫し新鮮味を出し、地理実習・演習・巡検を重んじ、授業科目を設定して、高いレベルの授業を行うなど積極的であり、授業熱心であり、教育に情熱を傾けた。十六年弱の高師在勤中に、中目覺なかのめあきらが調整した授業プログラムは、広島高師地理授業科目として継承されていく。中目は正規の授業の上、夏期講習に積極的に取組み、地理教育の向上にも力を尽した。

留学から帰国直後三年間は、学内での教育の傍ら野外調査（国内、外）をし、続く五年間は行政手腕が認められ、生徒監、文部省視学委員、地歴部主幹と要職につく。京都帝大の地理学講師（隔週講義）を三年間つとめ、地理教科書編集するなど、学内外で縦横の活躍をする。教育視察のための外国出張も中目覺なかのめあきらの民族地理学研究の糧にもなる。北方先住民調査を初めとして地形調査など野外調査をする。中目覺なかのめあきらのこのような調査では、秋芳洞の計測、樺太の民族調査などにみるように、多くのフィールドに高師地歴科の学生が同行している。労をいと

わずフィールドに越き、熱心な生徒が付いて来る。先住民とも語りながら調査研究をすすめる。それが学校での教育に生かされていく、正に「新しい逍遙教授」(modern peripatetic professor)である。氣候変化の研究、それに伴う日本の農業災害や東アジア民族移動の研究は先駆的ユニークな業績であった。数年にわたる調査研究が徐々に結実、論文発表が目立つようになる。高師最後の五年間は、学内外の要職から身を引き、それまでの調査研究を纏めて、爆発的な勢いで著書論文を公刊し、学界だけでなく一般的にもそして外国でも大きな反響を呼ぶ。新設松山高校教授(教頭)に任せられ教育行政官としての階梯に足を掛ける。しかし教えることを楽しみながら著作も怠らない。高等師範学校は中等学校の教員養成を目的とした四年制専門学校であったが、そこには、高等教育・専門地理学が成立していた。そして中目覺の高師での教え子の中から中野竹四郎ら七人もの、旧制高校、専門学校の地理学教授が出ておることは注目に値する。

中目覺の研究に、焦点をしばって括めよう。得意の外国語を利用して、ヨーロッパの諸文献を翻訳、紹介することは、中目覺にとっては、余りにも平易なことで、あまりにも平凡すぎた。中目はこのような道を歩まず、諸外国語、諸文献を自家薬籠中のものとして、国際感覚、日本人としての強い自覚のもとで、雄大な仮説を設定・検証していくという方法を探り、そのためには既成の学問枠にこだわらなかつた。このような方法は当時日本では必ずしも容れられなかつた。英独佛伊露西支エスペラントと八ヶ国語に通じ、ヨーロッパの学風になじんだ中目覺にとっては当然のことをしたにすぎなかつた。満三ヶ年留学の研

究・生活体験を踏まえて、談論が日本からドイツへ、更に中国へという風に飛ぶのは、中目にとつてはまことに自然の成行きであった。おのずから通文化研究 (cross-cultural study) になっていた。そして学科の枠を越えて学際的研究 (interdisciplinary study) になっていた。

ことに地理学という学問の内容について、ヨーロッパのそれと日本とはかなり認識が異なっていた。その一つの現われは地理学会の構成員、活動である。ヨーロッパではその幅が広い。日本では地理学会は狭くて、ひ弱いものになっている。また外国語に対して与えられた日本の対応語・訳語がかもし出した歪が、日本の地理学を矮小なものへと導いた嫌いがある。中目地理学は、F. ラツチェル (一八四八—一九〇四)、A. ヘットナー (一八五九—一九四一)、E. ハンチントン (一八五九—一九四一) と、その考え方を共有する所が大きく、地域、環境、地理的刺激は中目地理学の重要な鍵語であった。最もユニークな研究業績は歴史時代における気候変化及びそれに起因する民族移動など、民族、言語地理学及びオロッコ、ニクブンという二つの先住民族言語の文法の研究である。国内的に大反響を呼起したのは前者であり、国際的に高く評価されたのは後者である。

地域研究、通文化研究、学際研究が叫ばれる今日、日本で、中目覚の諸研究は改めて高く評価されるべき先駆的業績である。大阪外語初代校長へと教育行政官として栄進し、エリートコースを登っていくが、世界各地、ことに隔遠の地に旅し、気宇壮大な仮説の下で、観察・探訪しすぐれた旅行記、地誌の執筆を怠らなかつた。かくて、大阪地理学会長に推され、東京地学協会評議員にも選出され、大阪外語退官後

も引続き長くその役をつとめる。

注

二通りある。第一は「中目覚著作一覽」(第5表)の通し番号を本文記載事項の右下に (I—8) の如く、ローマ数字とアラビア数字をハイフンで結んで表示したものである。第二は記載事項の右下に (1) の如くアラビア数字 (括弧つき) で示し、この注の欄に書誌事項を示すものである。

(1) 「中目覚なかめ覚と広島高等師範学校」『地理』四四—四一、一九九九年。

Akira Nakanome 1874—1959, *GEOGRAPHERS: Biobibliographical Studies*, Volume 20 edited by Geoffrey Martin, in press に續くものである。

(2) 秦純乗「中目覚先生のこと」『華北日本語』二巻六号、一九三三年六月。

(3) 山田利雄「中目覚先生の人となり」一九七二年五月、小原包月「中目覚先生のことども」一九七二年三月、山崎安治「アルプス山とライン河の著者の中目覚氏」、名須川浩「中目覚先生略歴」一九七二年十二月。

(4) 小原包月「中目覚先生のことども」。

(5) 中目伊四彦(中目覚四男)談(一九九九年十月)。

(6) 中目覚「八十年間の思い出」『母校創立卅五周年記念』大阪外国語学校、一九五七年。

(7) 『宮城県名士宝鑑』一九四〇年。

(8) 中目覚「出入司」「ふるさと」(仙台)、一九三三年一〇月。

(9) 「還暦記念」(白嶺時報) 第五、一九三四年。

(10) 「米墨見聞録」「海外視察録」第五卷、大阪外国語学校、一九二五年。

(11) 伊地智善繼談（一九九九年四月）。

(12) 「創立四十年史」 広島文理科大学・広島高等師範学校、一九四二年。

(13) 目黒士門（中目覺の孫）石田宛書翰（四月三十日付）。

(14) 主として「創立四十年史」 広島文理科大学・広島高等師範学校、一九四二年、による。

(15) 「追憶」 広島高等師範学校、創立八十周年記念事業会、一九八二年。

(16) 「京都帝国大学史」 第四章「文学部」、昭和十八年。

(17) 「記事」 「校友会々誌」 第九号、広島高等師範学校校友会、一九〇八年三月。

(18) 「会報」 「会誌」 第三号、広島高等師範学校地理歴史学会、一九二二年十一月。

(19) 「通信」 「上掲書」 第四号、一九一四年五月。

(20) 「通信」 「上掲書」 第六号、一九一六年三月。

(21) 「通信」 「上掲書」 第六号、一九一六年三月。

(22) 「通信」 「上掲書」 第七号、一九一七年三月。

(23) 「彙報」 「歴史と地理」 一一一、一九一七年。

(24) 小田内通敏「文部省開催 広島高等師範地理科講習会概要」 「教育学術界」 二十一卷第六号、一九一〇年。

(25) 小田内通敏「人文地理学への道」 「人文地理」 三卷三号、一九五一年。

(26) 「会報」 「会誌」 第五号、一九一五年三月。

(27) 中目覺「近藤重藏時代における東西の地理学」（講演要旨） 「会報」 第五号、広島高等師範学校地理歴史学会、一九一五年三月。

(28) 「手宮洞窟シンポジウム」 小樽市教育委員会、一九九七年。

(29) 斎藤忠「日本の発掘」 東京大学出版会、一九六三年三月。

(30) 中目覺「小樽の古代文字」 春陽堂、一九二六年。

(31) 石川直章「石田への書簡（一九九九年六月）」。

(32) 中目覺「バルカン紀行」 大阪地理学会、一九三二年。

(33) 千田 稔「高千穂幻想」 P H P 研究所、一九九九年。

(34) 注(18)をみよ。

(35) 「秋芳洞の研究史」、秋吉科学博物館、一九八四年。

(36) 松山高等学校同窓会編集「真善美 松山高等学校創立六十五周年記念」、一九八四年。

(37) 名須川浩「中目覺先生略歴」。

(38) 「暁雲こむる」 松山高校同窓会、一九八八年。

(39) 中目覺「気候と歴史」 大阪東洋学会、一九三二年。

〈謝辞・あとがき〉

地理学温故知新の契機を与え下され、終始激励協力下さる広大地理教室に謝意を表します。先師中目覺研究をすすめるに当って、中目覺家の方々をはじめ関係の面々から、さらに私の教え子からも協力の手が差し伸べられ、どんなに元気づけられていることか。特に本篇関係資料収集については尚志旧友からの温かい配慮・広島大学五十年史編集室の積極的協力をいただいた。なお福山大学附属図書館からは終始行届いた情報検索協力をいただいた。記して深謝したい。

（いしだ ひろし・福山大学教授、広島大学名誉教授）